

秋田県文化財調査報告書第59集

館下遺跡・梨ノ木塚遺跡・宮の前遺跡  
(第2次) 発掘調査概報

秋田県埋蔵文化財センター

1979・3

秋田県教育委員会

# 目 次

## I 館下遺跡発掘調査概報

1 遺跡の位置と現状.....	1
2 調査の概要.....	1
3 検出遺構と出土遺物.....	1
4 まとめ.....	5

## II 梨ノ木塚遺跡発掘調査概報

1 調査に至る経過.....	14
2 遺跡の位置.....	14
3 調査の方法と経過.....	14
4 発掘調査.....	19

## III 宮の前遺跡発掘調査概報

1 遺跡の立地.....	62
2 調査の概要.....	62
3 まとめ.....	62

## 凡　例

1. 本調査概報は秋田県教育委員会が主体となって国庫補助を得て緊急発掘調査した遺跡の調査概報である。
2. 本概報作成には下記のものが担当し、岩見、畠山、庄内がまとめたものである。  
館下遺跡、岩見誠夫、永瀬福男、補佐員、藤井安正、田口　都。  
梨ノ木塚遺跡、畠山憲司、橋本高史、補佐員、栗沢光男。  
宮の前遺跡、庄内昭男(県立博物館)、山田貞治(調査員)。
3. 本概報の全体編集は秋田県教育庁文化課があたった。
4. 本概報とは別に各遺跡の本報告書が年度内に別冊で発行するので、それとあわせて活用してほしい。

# I 館下遺跡発掘調査概報

## 1. 遺跡の位置と立地

館下遺跡は、秋田県能代市久喜沢字館下に所在する。

秋田県北部の降水を集めて能代平野で日本海に注ぐ米代川の北岸には、数段の段丘によって構成される広大な東雲台地が広がる。館下遺跡はこの東雲台地の南縁に当り、眼下に米代川の河道を臨む標高28mの低位段丘上に位置し、茗荷畠、杉の苗圃、雑木林として利用されてきた。

この米代川に臨む東雲台地の南縁には遺跡が多く、館下遺跡の周辺にも発掘調査の行われた「ゆずり葉遺跡」（繩文、平安）、「中台遺跡」（平安）、「大内坂遺跡」（繩文、平安）が存在する。

## 2. 調査の概要

発掘調査は、昭和51年度から東北農政局能代開拓建設事業所によって進められてきた、国営の土地改良事業に起因する緊急発掘調査である。

調査期間は、昭和53年5月10日～10月1日、調査対象地は約50,000m<sup>2</sup>に及ぶ舌状に西方に伸びる段丘上の平坦地で、中央部より西寄りに発掘区を設定し、約11,000m<sup>2</sup>を発掘調査した。

その結果、後期旧石器時代のナイフ形石器、繩文時代中期の竪穴住居跡群と数多くの土器、石器の出土を見た。

## 3. 検出遺構と出土遺物

### 1 後期旧石器時代の遺物

#### ○ナイフ形石器

ローム層上面から出土した硬質頁岩製の杉久保型ナイフ形石器である。

全長9.4cmと6.7cmの二点で、発掘調査による発見は、県北地方で最初のものである。

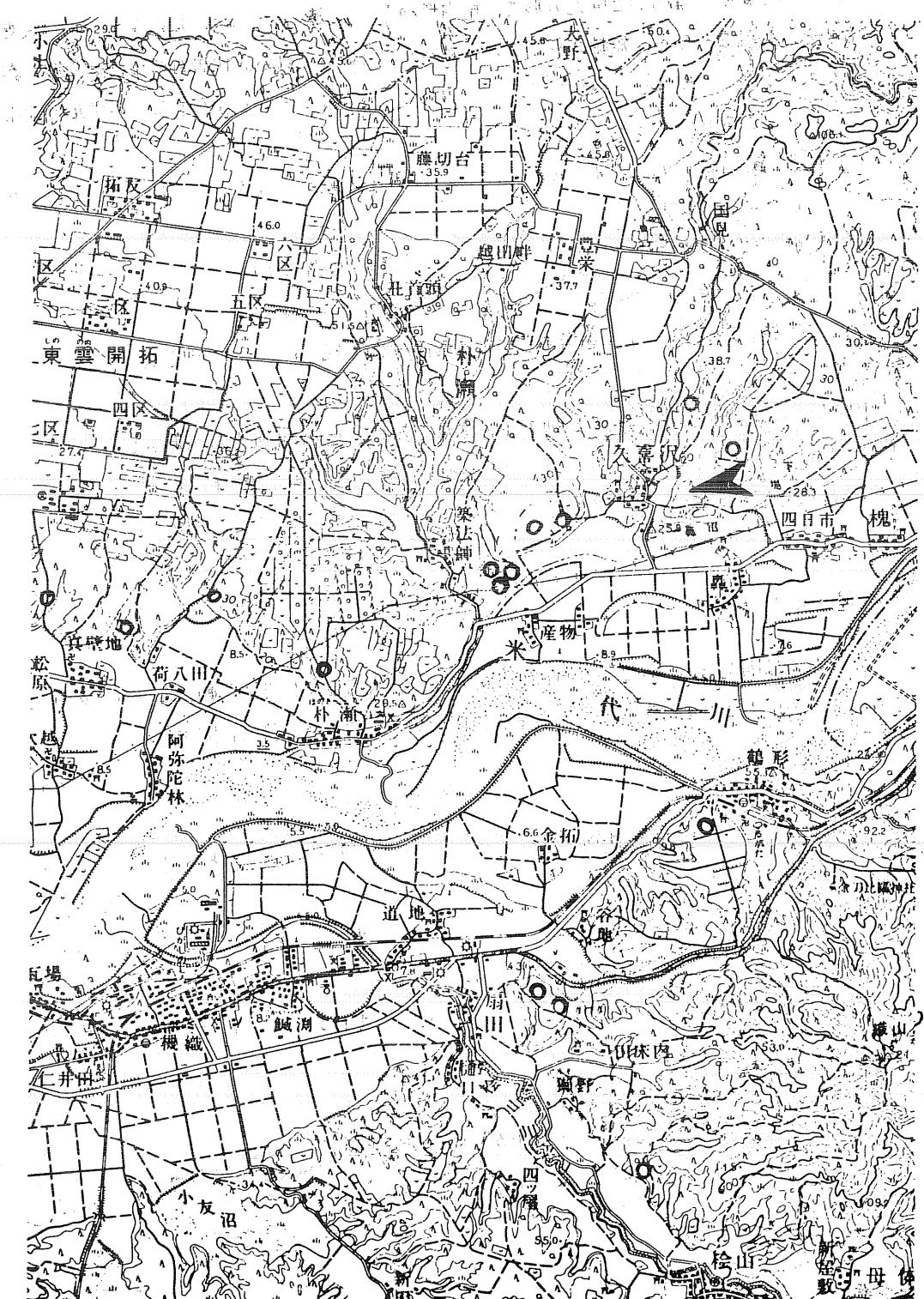
### 2 繩文時代の遺構と遺物

#### ○竪穴住居跡

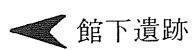
現在確認されているものは34棟ある。これらはA・B二グループ（集落）に分かれ、両者とも繩文時代中期のものである。

#### A グループ

段丘西端部に存在し、集落を形成しているもので、中期中葉の20棟の住居跡が発見されてい



1:50,000 能代



○ 遺物包含地

1000m 0 1000 2000 3000

図1 遺跡の位置および周辺の地形図

る。

住居跡の平面形は楕円形と隅丸方形で、楕内形のものは長軸9～10m、短軸5～6mの大型のものと、長軸5～6m、短軸3～4mの中型のものとに分かれる。住居跡の壁は緩やかに落ち込むものが多く、床はしっかりしており、炉は長軸線上に2～3基存在する。いずれも地床炉で、埋甕のあるものもある。

柱穴は住居跡内にあり、長軸に添って相対して4個・6個・8個存在し、深さ1mにも及ぶしっかりしたものである。

また、炉の傍には径50cm～1m、深さ30～50cmの摺鉢状に落ち込むピットが存在する。このピットの周囲には土手状に縁がまわる。

これらの住居は、長軸が南北を指すものと、南西・北東を指すものに大別される。

#### Bグループ

中期末葉の集落跡と考えられる14棟の住居跡群である。住居の平面形は円形もしくは不整円形で、床は地山を浅く掘って作り、中央よりやや北東寄りに石囲炉が構築されている。

柱穴は壁もしくは壁の外側に並ぶものが多く、住居跡の壁寄りにフラスコ状のピットを有するものもある。

#### ○竪穴状遺構

円形もしくは隅丸方形の径2～3mの小型のもので、壁もしくはその外側に4～6本の柱穴を有し、床の中央に焼土のあるものもある。楕円形大型の住居跡の傍に付随する。

#### ○フラスコ状ピット

主用途が貯蔵穴と考えられ、床面に近づくにしたがい末広がりの構造をとるフラスコ状ピットが15基発見されている。

Aグループに伴うものは段丘の西隅部に分布し、住居跡外にあって柱穴を有し、深さ2mに及ぶ大型のものが多い。Bグループに伴うものは、Aグループに伴うものに比し小型で、フラスコ状よりも袋状と称した方が適切かも知れない。検出3例中2例が住居跡内に存在する。

#### ○陥し穴状遺構

Bグループの住居跡内で1発見され、埋土から考察すると住居跡構築に先行して掘られている。全長2m90cm、幅は上部で50cm、深さ1mある。

#### ○人工遺物

### 土 器



図2 穫穴住居跡の分布

円筒上層C式, D式(Aグループの住居跡区), 大木10式(Bグループの住居跡区)と考えられる土器である。

### 石 器

石鎌, 石匙, 石錐, 篦状石器, 磨製石斧, 石錘, 凹石, 石冠などで, 石鎌には基部にアスファルトの塗布痕のあるものが多い。

### 土偶・土製品

土偶3, スタンプ状土製品1が出土している。しかし, いずれも破損品である。

### ○自然遺物

クルミの炭化物がフラスコ状ピットから出土している。

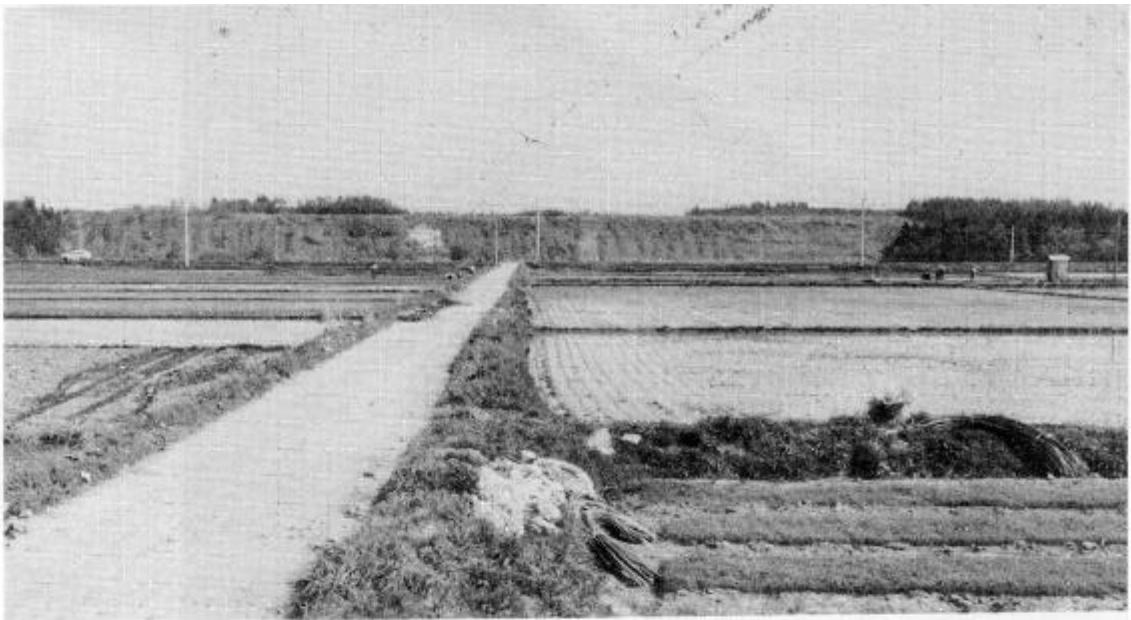
## 4. ま と め

本遺跡は、後期旧石器時代と縄文時代中期のもので、中期中葉の集落は段丘上の西縁寄りに、末葉の集落は北東縁寄りに形成されていることが判明した。

また、中葉の住居跡は楕円形や隅丸方形で炉は地床炉、末葉のものは円もしくは不整円形、石囲炉のように、住居跡にも明瞭な違いが認められた。

図版 1

遺跡遠景  
(南から)



Aグループ  
の住居跡と  
フラスコ状  
ピット群



Bグループ  
の住居跡群



図版 2



1号住居跡  
(Aグループ)



4号住居跡  
(Aグループ)



5号住居跡  
(Aグループ)

図版 3

6号住居跡  
(Aグループ)



30号住居跡と  
フラスコ状  
ピット  
(Aグループ)



34号住居跡と  
フラスコ状  
ピット  
(Aグループ)

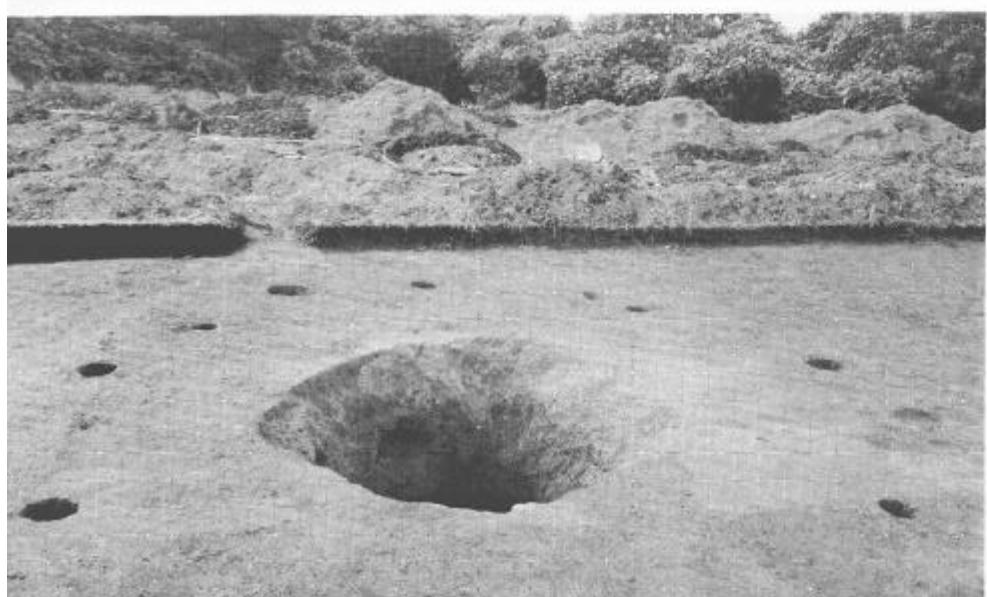




22号 竪穴状  
遺構  
(A グループ)



2重構造の  
9号 フラスコ  
状ピット  
(A グループ)



13号 フラスコ  
状ピット  
(A グループ)

図版 5

20号住居跡  
(Bグループ)



21号・23号住  
居跡とプラス  
コ状ピット  
(Bグループ)

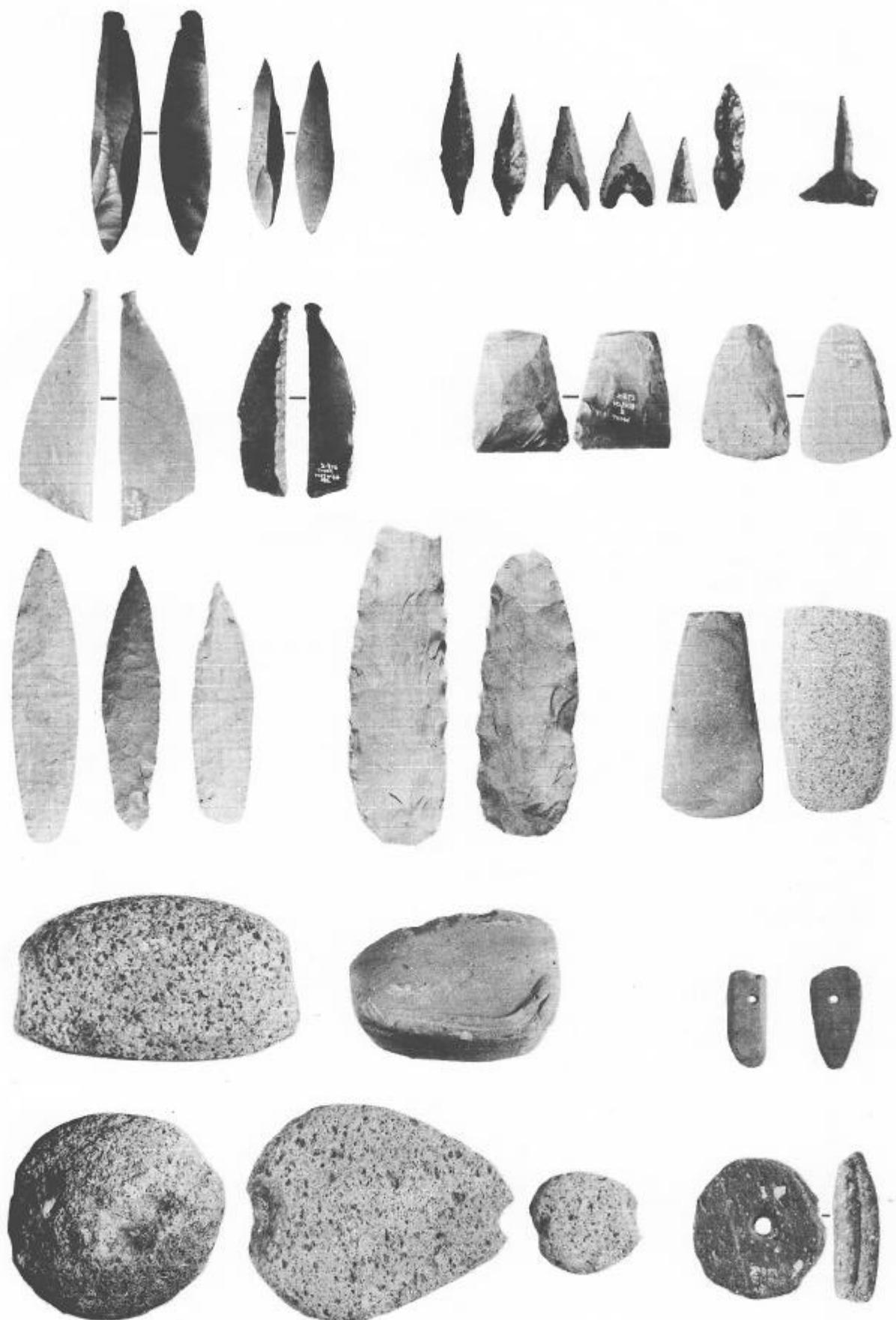


15号住居跡  
(Bグループ)





図版 6 土 器・土 偶



圖版 7 石 器・石製品

## II 梨ノ木塚遺跡発掘調査概報

## 1. 調査に至る経過

平鹿郡増田町に所在する梨ノ木塚遺跡は、昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際発見された、いわゆる周知の遺跡である。（秋田県遺跡地図に県登録番号 729番として載っている）この遺跡の北北西 1.5kmに、享保5年から昭和32年まで約250年間稼動していた吉野鉱山がある。この吉野鉱山の沈殿池が過去4回にわたり決壊し、水田にズリが直接流入、また数回の洪水により、ズリ浸透水が用水を経て水田に流入した。このため、吉野近辺の水田一帯が鉱毒に汚染され、そこから取れる汚染米に対して何らかの対策を構ぜざるを得なくなった。そこで、秋田県土壤汚染対策室が、昭和53～54年度に汚染土壌対策に関する公害防除特別土地改良事業として、土壌を改良するため客土工法により工事を実施することとなった。

計画どおり工事が行われると、水田下の遺跡の一部が破壊される恐れが生じた。このため、秋田県土壤汚染対策室と文化課が協議して、工事着工前に発掘調査を実施し、記録保存をはかり、今後の資料とするものとした。こうして、梨ノ木塚遺跡は増田地域（吉野地区）農用地土壤汚染対策関係遺跡（梨ノ木塚）発掘調査として、5月8日調査に開始された。調査対象面積は15,562m<sup>2</sup>、発掘予定面積は6,500m<sup>2</sup>である。

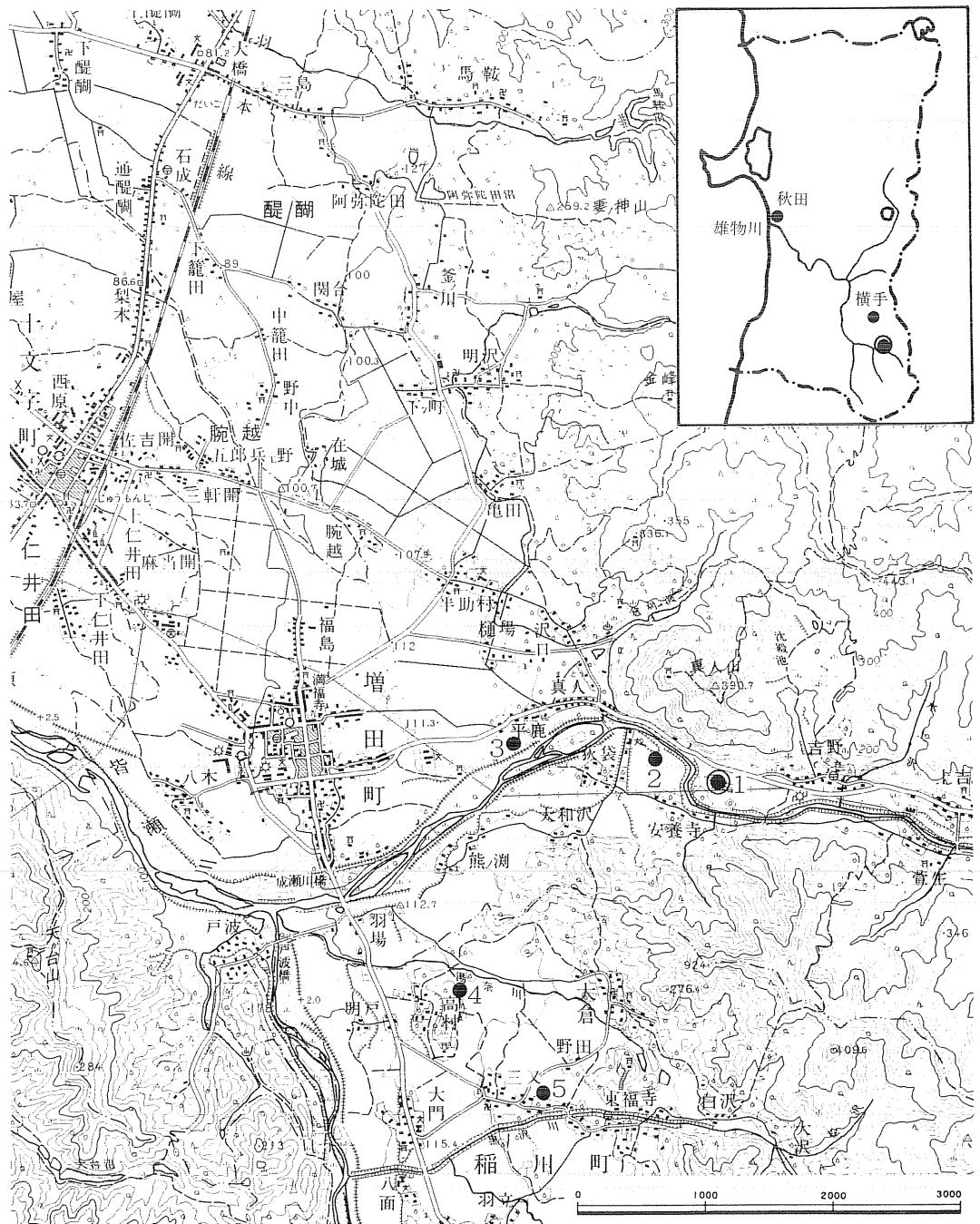
## 2. 遺跡の位置

梨ノ木塚遺跡は、秋田県平鹿郡増田町吉野字梨ノ木塚21～25番地に所在する縄文時代の遺跡である。

奥羽山脈中、秋田・宮城・岩手の三県にまたがる栗駒山（須川岳1,628m）に源を発する成瀬川は、数段の河岸段丘を形成しながら西流し、雄物川に注ぐ。遺跡は、この成瀬川が山間をぬけ県南の穀倉横手盆地に出ようとする開口部に位置し、国鉄奥羽本線十文字駅の南東約5.4km、国道342号線の南側にある。遺跡ののる段丘はこの周辺では下位から2番目のもので、現在は水田と一部畑地となっており、現河水面の比高は6～10mである。土器及び石器等の遺物は、東西400m、南北100mの広い範囲に認められ、中央部南側の畑地に特に集中する傾向にある。また、遺跡の西方には、縄文時代晚期～弥生時代の遺物を出土する真当遺跡や、平鹿遺跡（晩期大洞C<sub>2</sub>式）があり、当遺跡との関連が考えられる。（第1図 図版1）

## 3. 調査の方法と経過

昭和53年5月8日、発掘器材の現地搬入、遺跡の現況撮影を行った。同9日、遺跡中央付近に任意の基準杭を打ち、これを原点に任意の磁北を求め東西南北の基線を決定した。この原点



第1図 遺跡の位置

1 梨ノ木塚遺跡

2 真当遺跡

4 森遺跡

3 平鹿遺跡

5 清水遺跡

をMA50とし、これから4mごとに東西はアルファベット2文字の組み合わせ、南北は2桁の数の組み合わせ(00~99)を用い、東西は4グリッド32mでアルファベット2文字の先の方を変えた。(東にMA, MB……MG, MH, NA, NB……NH, OA……)各グリッドの名称は南東隅の交点の文字と数字を用いることにした。

10日から発掘作業を開始したが、遺跡の範囲があまりにも広いため、任意のグリッドを任意の間隔で掘り、遺構・遺物の集中した地点を広げることを最初の方針とした。また、工事の都合上中央部より東側を早く調査終了して欲しいという要望があったため、西方部分は最後にし東側から急ぐことにした。5月15日、遺跡東端部RC59から2個の埋設土器が直立して発見された。2個とも無文の壺形土器で、一方は鉢形土器が倒立してかぶせられていた。6月1日、PC62で3個の埋設土器が検出された。いずれも晩期深鉢形土器で直立しており、この付近に墓域の存在することが考えられた。

6月5日から遺跡中央部をI区、東側をII区、西側をIII区とする区域設定を行い、NC53, PC62周辺の拡張を行っていった。6月30日までに、PC62周辺からは計30基の埋設土器を検出し、さらに不明瞭ながら土壙もその周辺に存在することを知った。

7月3日、土地改良事務所側から、調査対象外になっていた遺跡中央部分に道路を取りつけるため早急にこの部分を調査して欲しい旨連絡があり、同4日よりこの部分の調査に入いった。(このため、I区を二つに分けNC53周辺をI-A区、この部分をI-B区とした)同20日までに、I-B区の調査を終えたが、同区からはII区でみられたような埋甕13基、土壙基20基を検出した。

7月21日からI-A区、II区を平行して調査したが、遺跡部東端からは縄文時代中期の住居跡や晩期の土壙などが多数検出された。そこで、II区も西側をII-A区、東側をII-B区とした。II-A区で、埋甕が水田耕作土下すぐ(15~20cm)の黒褐色土中に口縁部を現した。これを実測、写真撮影し取り上げ、さらにその下の黄橙色地山土上面まで掘り下げるとき、土壙のプランが認識された。土壙は小判形のプランが多く、中に配石したものや、埋土中に河原石を直立させたものがあり、土壙墓と判断された。この間、あまりの猛暑のため地山に亀裂が入り散水しながら調査するという毎日であったが、8月27日までにI-A, II-A, II-B区の全ての調査を終え、III区に移動した。

8月29日から遺跡西端部のIII区の調査に入いったが、任意にグリッドを調査した際、遺構・遺物の存在がきわめて薄かったのと、範囲が広いため、バックホーンを入れて表土を機械によって剥いだ。調査の結果、段丘縁辺部に遺構・遺物がやや集中し、中央に行くほど少なくなることがわかった。9月20日までに、前期の土壙、中期の竪穴住居跡、埋甕などを実測、写真撮影した。(第2図)

9月21, 22日、III区の補足調査、器材の搬出をし、全ての発掘作業を終了した。この間、8



第2図 地形及び発掘地域図

月19日には一般町民を対象に現地説明会を行い、埋蔵文化財保護の意識の普及に努めた。

## 4. 発掘調査

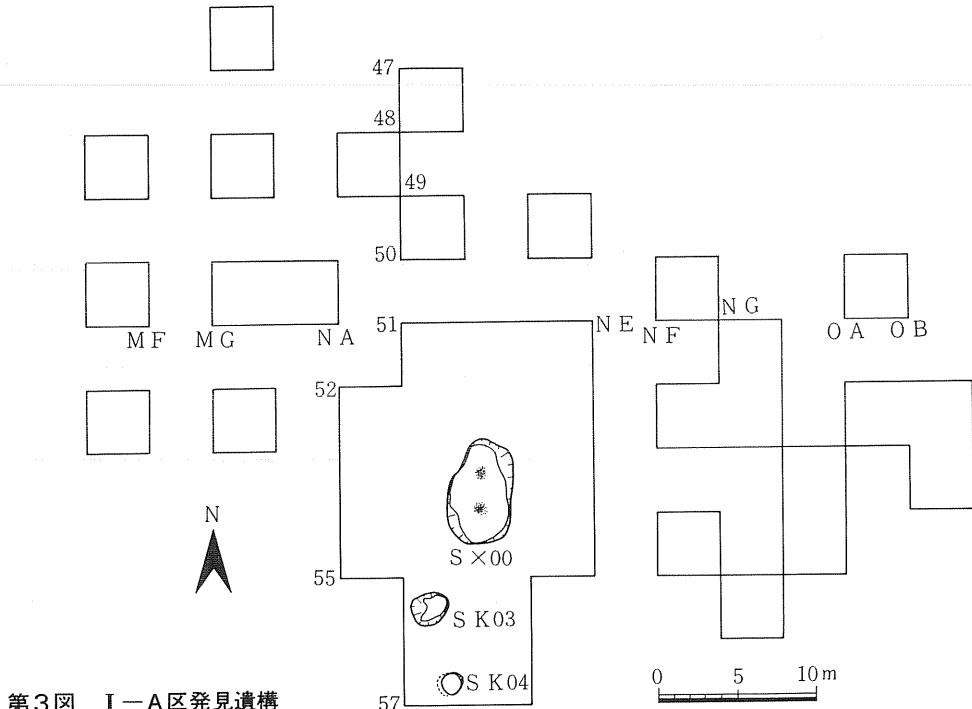
### 1 I-A区

I-A区としたのはMEラインとOCラインに囲まれた地区である。この中で遺物・遺構の集中したのはNAライン以東である。地層は第1層黒褐色上部耕作土(10~15cm), 第2層同下部耕作土(5~15cm), 第3層暗褐色土(10~15cm), 第4層黒褐色土(10~15cm), 第5層明褐色漸移層があり、第3, 4, 5層から遺物が出土した。NAラインから西側では現況でも約0.5mほどの落差があり、水田耕作土下はすぐに大きな河原石を含む段丘礫層があり、特に遺物の集中もなかった。

#### (1) 発見遺構 (第3図)

I-A区では、43グリッド 172m<sup>2</sup>を調査し、竪穴状遺構1, 土壙2を発見した。発見した遺構はいずれも調査区中央南部に集中しており、この地域よりも南側の畠地にこれらに連続する遺構の存在が強い。

また、最終的に遺構としたものは3であるが、S×00の北西側と南西側に一般に風倒木痕と言われている土まんじゅう的な地山土の高まりがあったが、特に人為的な遺構としては取り上



第3図 I-A区発見遺構

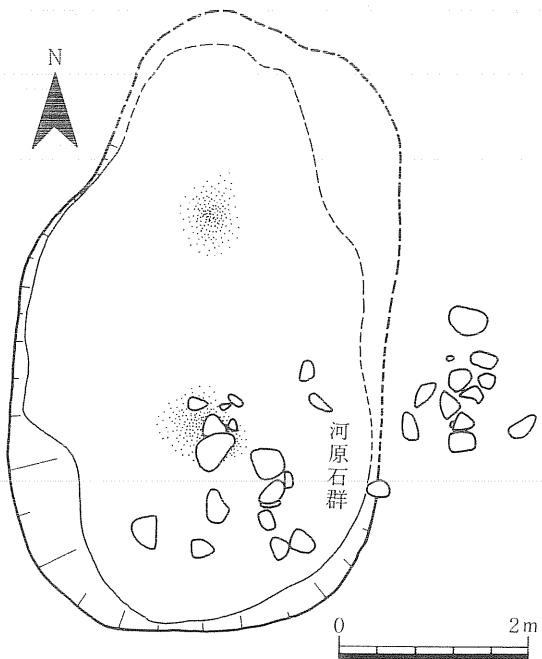
げなかった。しかし、S×00の上層に広がっていた河原石群中から出土した土器片とS×00埋土中から出土した土器片で接合するものがあり、河原石群は人為的なものと思われる。

#### S×00 竪穴状遺構 (第4図 図版3)

遺構のおおよそのプランを確認したのは地山面直上である。この遺構の約30cm上の黒土層からは縄文時代晚期の遺物の集中が見られ(図版2)，南半部からは20cm×20cm～30cm×40cm前後の河原石の集中が見られた。

平面プランはおおよそ南北 6.5m×東西 3.9m，深さ 0.2m の不整橿円形であるが，西～南壁以外は明確ではない。遺構中軸線上に 0.5m×0.6m，0.8m×1.0m の焼けた跡が 2か所ある。床面は凹凸が激しく，柱穴は検出できなかった。

#### 出土遺物 (第5・6図 図版4・6)



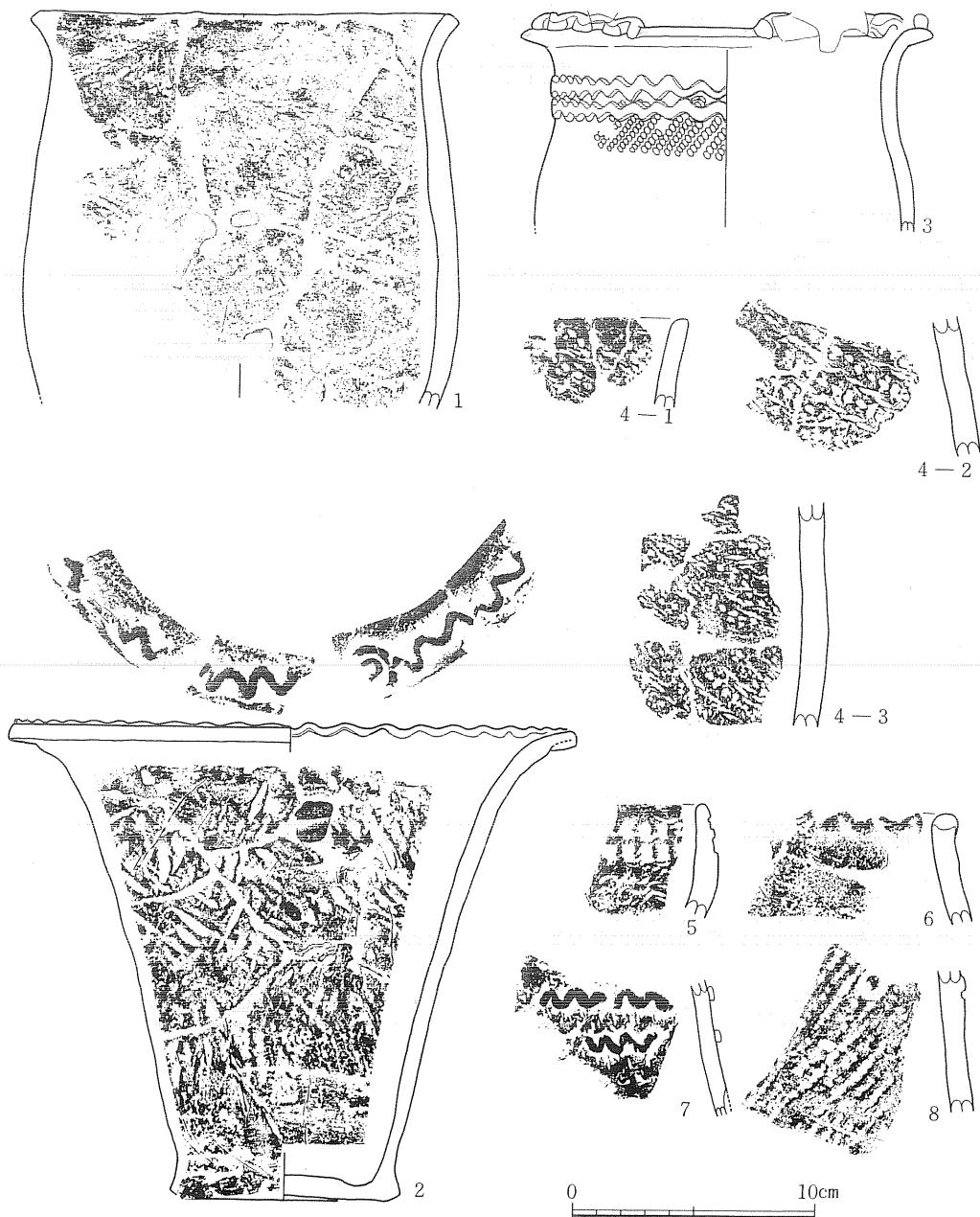
第4図 S×00 竪穴状遺構

大部分は埋土中からのものであるが床面直上からも前期の土器，石器が若干出土している。また埋土中からの土器と，上層河原石群中出土した土器とが接合するものもある。第5図1は，最大径が口縁部と胴部にある深鉢形土器で口径17.5cm。頸部から体部には押圧したような縄文が不定方向に施されている。内外面とも煤状炭化物が付着しており，体部は火熱のため器面がもろくかれている。2は床面直上から押しつぶされた形で出土した朝顔花型の深鉢形土器である。口径23cm，底径9.5cm，器高19.5cm。体部には粗大な縄文が施されるが不鮮明である。口縁部内

面を細い粘土紐貼付による小波状文が，途中に渦巻文を加えながら一周する。内外面の割れ目などに粘土紐巻き上げ形成痕が見え，粘土紐の幅は 1.5～3 cm 前後である。全体に赤褐色を呈し，胎土・焼成ともふつう。底部を除く内面全体と，外面の土器割れ目には煤状炭化物が付着している。3は頸部がややくびれ口縁部で強く外反する深鉢形土器である。頸部に2条の粘土紐貼付小波状文が上の条の谷と下の条の山とが接するように横位に一周する。口唇部にも，内面向かい4つの山，3つの谷を形づくる粘土紐貼付小波状文がそれぞれ独立して4か所に付される。口縁部から頸部小波状文にかけては無文，その下に二つ折りにされた斜縄文が施される。4-1，2，3は頸部がややくびれる深鉢形土器の破片であるが接合しない。全面黒～暗

褐色を呈し、胎土にはほとんど砂粒を含まず、気孔状の細上孔があり、非常に軽い。不整撚糸文が全面をおおう。5は不整撚糸文を施したあと、口縁部下に2段の撚糸圧痕を付したもの。6は無文深鉢形土器の口端に刻目を持つ。

第6図1, 2は石匙。1は先端を欠き、2はごく小型で赤色。3はスクレイパー、主要剥離面への剥離は全く行われていない。4の全長は15.5cm。5, 6は偏平椿円形の河原石の長辺の

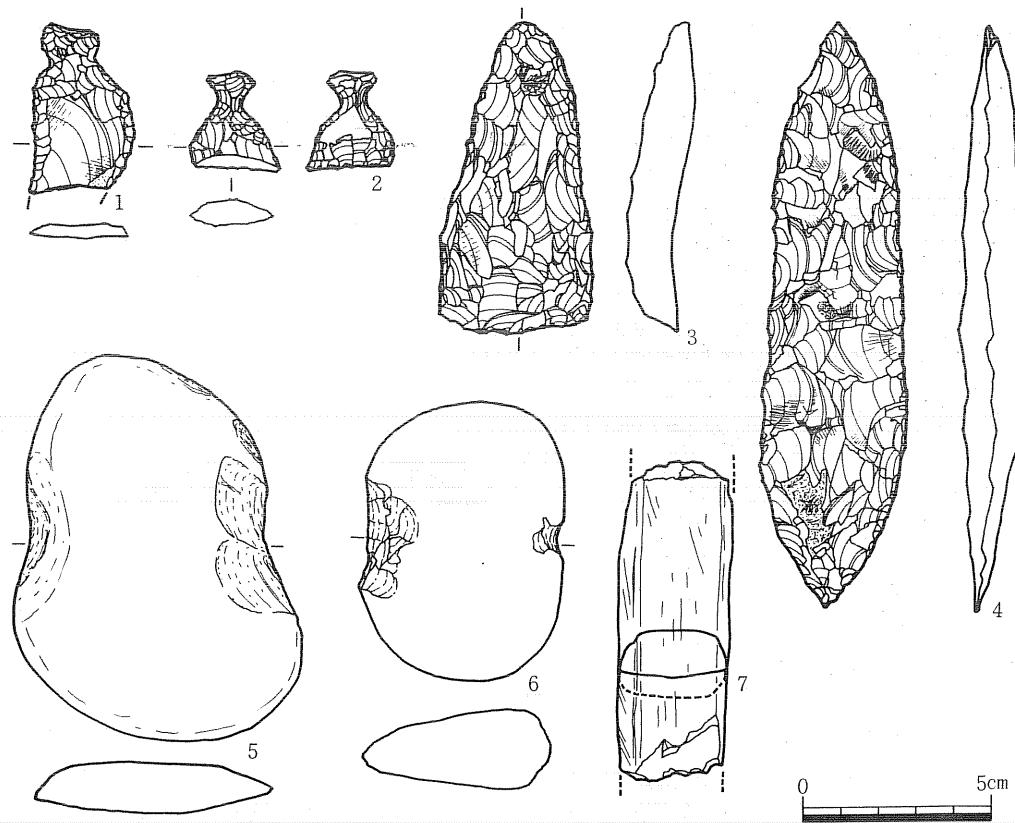


第5図 S×00出土遺物

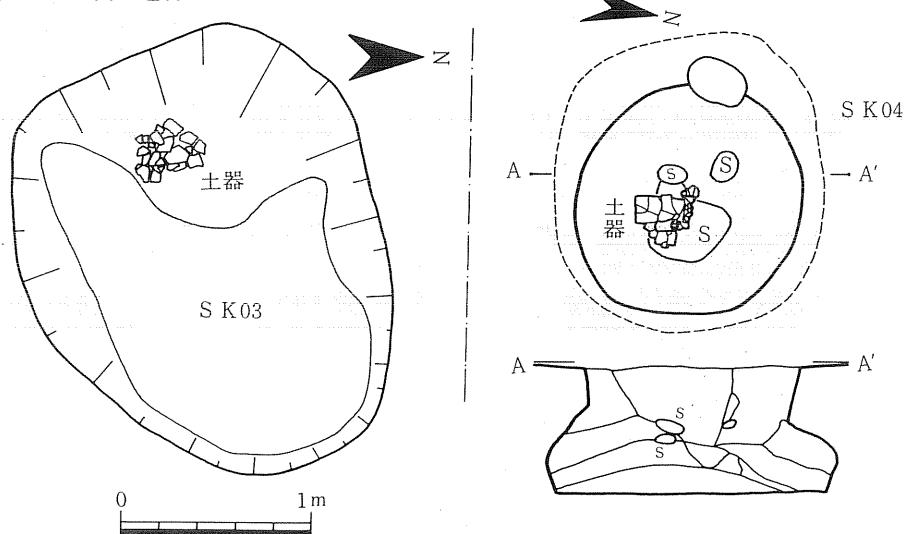
両端を両面から打ち欠いたもの。

### S K03 土壙 (第7図 図版3)

地山面まで下げてもはっきりしなかった不正橢円形の土壙で、長軸 2.4m、深さ 0.1~ 0.2



第6図 S ×00出土遺物



第7図 S K03, S K04 土壙

mである。底面は平らかではなく、西側部分から前期の深鉢形土器が1個出土した。

出土遺物（第8図1，2，第9図1～3，図版5，6）

第8図1は平底、平らかな口縁を呈し、頸部がわずかにすぼまる前期の深鉢形土器である。頸部と

体部下半には2～3段の綾絞文、

体部には組紐による繩文が施されている。内面には貝殻条痕文と思われる擦痕が横位に施され、体部下半になるほどすくくなる。色調は赤褐色であるが、体部中半以下は火熱のため赤変しもろくなっている。2は口唇部に刻目付粘土紐貼付小波状文が付されている。

#### S K 04 袋状土壙（第7図 図版4）

地山土の上の黒色土上面でおおよそのプランを確認できた平面円形の袋状土壙である。壙口部で径1.2m、壙底部で1.4mを計り、壙中央部でわずかに膨む。深さは図示できたのは0.7mであるが、実際には0.9m前後を有していたものであろう。埋土は図のようにゆるい山状になっており、その中心部に偏平な河原石、体部下半を欠く晩期の深鉢式土器があった。

出土遺物（第8図3，第9図4～7 図版5，6）

第8図4は平行する沈線と磨消繩文を持つ後期の土器。5は晩期の粗製深鉢形土器で、外面には煤状炭化物が付着している。体部の斜行する帶繩文は、原体を二つ折りにして横位に回転したもので、上端にその連続する痕跡が見える。

## (2) 出土遺物

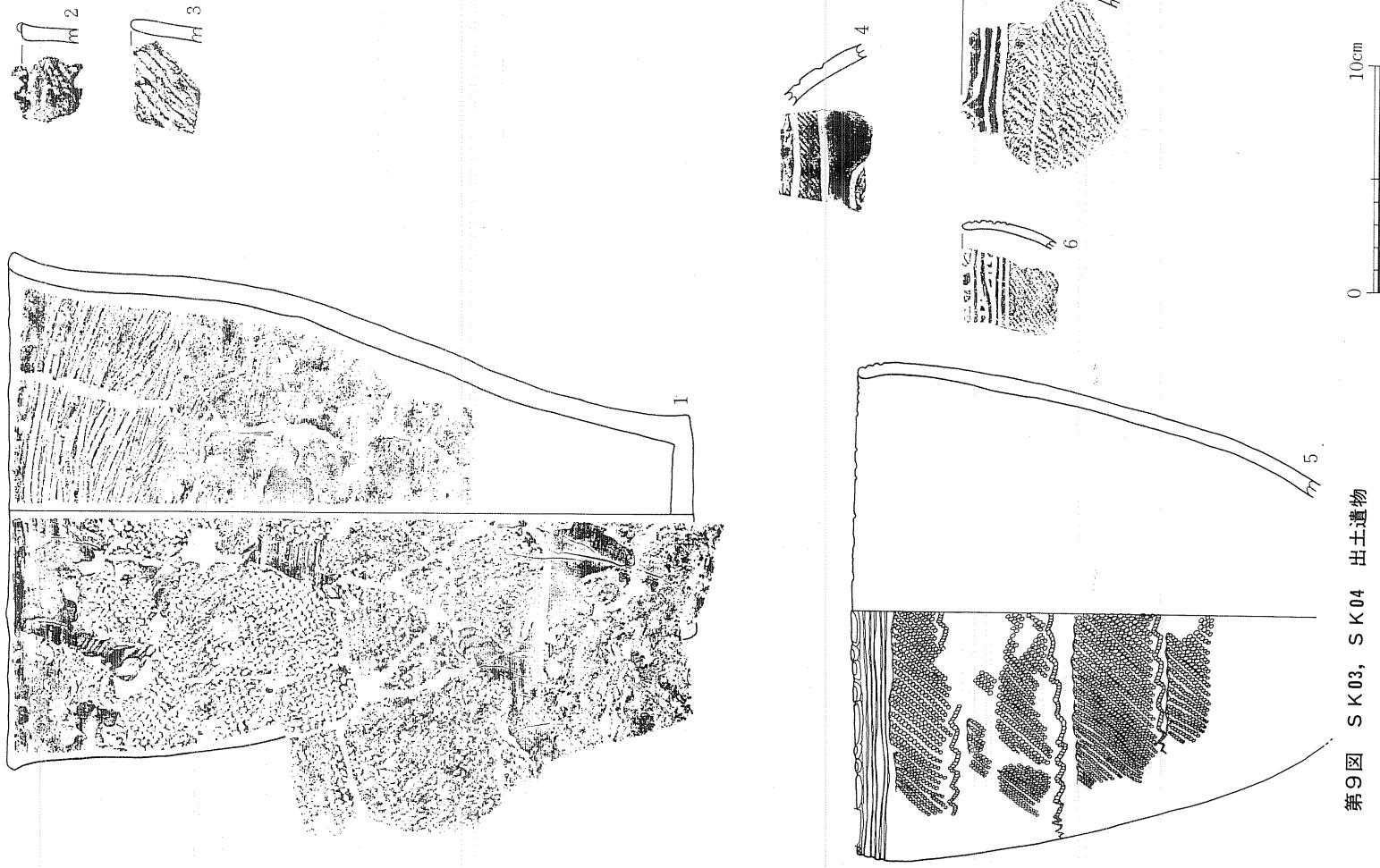
### イ. 土 器

I-A区における出土土器は繩文前期および晩期のものがほとんどを占める。特にN C, N Dの54付近に集中(80%)して出土したが、NAライン以西、OAライン以東では土器はほとんど出土しなかった。遺物が出土するのは、主に耕作土下の第III層暗褐色土から第IV層黒褐色土に至るこの2層中からであるが、前期と晩期がほとんどレベルを変えずに出土している。このため層位的に分けるのは困難であるが、不明確ながら晩期の土器は第III層、前期の土器は第IV層中に包含される傾向にあった。

梨ノ木塚遺跡出土の土器は第20類まで分けることができるが、I-A区からは第4～7, 16～19類の計8種類の土器が出土している。以下それらについて述べる。

第4類土器（第10図1～8, 18～19, 第17図200 図版7, 14）

第9図 SK03, SK04 出土遺物



器形は口縁が直上もしくは外反する深鉢形土器である。太い斜行繩文が地文として施されている。竹管円文（円形竹管文）をほぼ縦位に配したもの（1～2），半載竹管による爪形文を横位に配したもの（3），刻目を持つ粘土紐貼付文を持ちそれが口縁部を一周するもの（5，6，200）などがある。刻目を持つ粘土紐貼付文を持ちさらに刺突文（4）や竹管円文（6）を伴なうものもある。また繩文は施されておらず、口縁部に竹管押引によって施文するもの（18，19）があり、刻目を持つ粘土紐貼付文を直角に交差して伴なうものもある。

第5類土器（第10図9～15，第17図201 図版7，14）

器形は深鉢形でやや口頸部がくびれ胴部上半に最大径を持つ。9，10は口唇部内側に小波状の細い粘土紐貼付文が施される。複合口縁を持ち、胴部に二条の小波状の細い粘土紐貼付文を施し、その下部に円の下半部や変形8字形などの幾何学的文様を施す。201は口唇部に二条の小波状の細い粘土紐貼付文を施し、上の条の谷と下の条の山の部分同士を互いに接するように配し、数個の渦巻状突起がつく。また、胴部に四条の小波状の細い粘土紐貼付文を施し、地文として撲糸回転文を施す深鉢形土器である。

第6類土器（第10図16，17，第11図20～23，第17図202 図版7，8，14）

直線的に粘土紐を交差させて文様を形成するのがこの類の特徴である。

16，17は器形が深鉢形で、口頸部がくびれ胴部上半に最大径を持つ。口頸部に細い直線状の四条の平行粘土紐貼付文、さらにその上に同様の太さの粘土紐貼付文を直角に交差させて格子状文様を形成している。202は器形がやや内反する深鉢形土器で直径32cm、推定高約40cmである。口唇部に小波状の細い二条と太い一条の粘土紐貼付文を、前者の割合が大きいながらも、交互に配し、細い二条の粘土紐貼付文は上の条の谷と下の条の山の部分で接するように施されている。さらにそれらの粘土紐貼付文がなくなる数か所で山形に口縁部を形成する。胴部は、太い粘土紐貼付文が方形、または円形に外わくを形成し、その内部に細い粘土紐貼付文を格子状に施す。外わくが方形のみか方形プラス円形で一単位をなし、その各単位間には太い粘土紐を×字状に交差させて施文する。胴下半部内側に炭化物の付着が見られた。

第7類土器（第11図24 図版8）

断片一片のみのため器形は明瞭でないが、頸部に縮まりがあり胴部が幾分ふくらむ深鉢形土器と思われる。二条の平行沈線でX字状に施文され、下半部には刻目もつけられていた。

第16類土器（第11図25，26 図版8）

器形は口縁部が直上するか、口頸部で一旦くびれ胴部上半に最大径を持つ深鉢形土器である。口縁部にS字状沈線文を配した磨消繩文が施される。体部に単節の斜繩文（LR）を横位に回転施文したものである。

第17類土器（第11図27～41，43～47，第12図48～53，63，72，第13図84，86，107，第14図135～137，第16図176，177，179，180～180，196～199，第18図203～207，210

器形は小波状口縁で内反するか口頸部にくびれのある深鉢形土器である。一部注口土器(41, 43, 135~137, 176, 177, 179180)もある。いわゆる羊歯状文を中心に口縁部に展開されるが、文様の展開のしかたで左傾の末端のかみあうものとかみあわないもの、右傾の末端のかみあうものとかみあわないものの4種類に分けることができる。本遺跡からは右傾の末端のかみあわないものと左傾の末端のかみあうものの2種類がほとんどで、その数はほぼ同じである。体部は単節の斜行繩文を横位に回転施文したもので、ほとんどLRであるが、少しRLのもの(37, 86)もある。薄手で焼成も良行である。

196~199は小波状の口縁を持ち、口縁部がくびれる深鉢形土器で、単節の斜繩文(LR)を回転施文する。

11~15, 205は台付土器の台部であるが、特に繩文は施されていない。205はすかしがはいており、平行沈線文によって区画された文様帶に連続刻目文を配しており、三条施文されている。

第18類土器 (第12図56~58, 61, 64~71, 74, 81, 第13図84, 88, 92~96, 100, 102~104, 110, 113~115, 118, 第14図131, 133, 134, 139, 第15図143~7, 2第16図173~195, 第18図208, 209)

139以前は口縁部が小波状または2個単位の突起をもち、内反する小形の深鉢形土器である。二ないし四条の平行沈線によって区画された口縁部文様帶に連続刻目文が施文される。薄手で焼成は良好である。単節の斜繩文を体部に横位に回転施文しており、ほとんどLRであるが、少しRLのもの(92)もある。

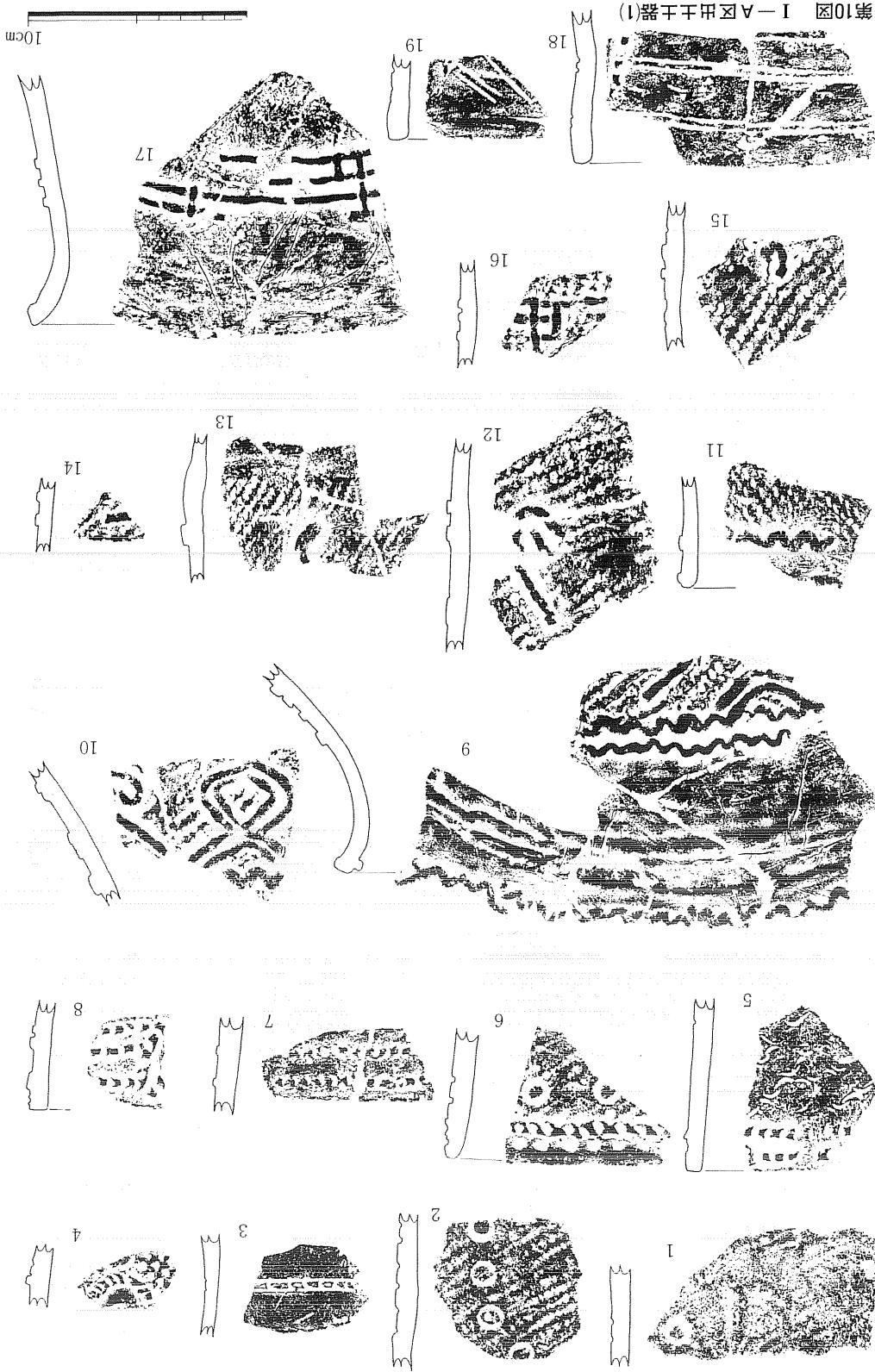
173~195, 208は器形は浅鉢形土器である。口縁部は単に平縁のものと突起を配するもの(44, 149, 154, 158, 162, 163, 170)がある。いずれも、口縁部の一ないし三条の平行沈線によって口縁部文様帶が形成され、連続刻目文を施されたものが多い。体部は磨消繩文によって雲形文やx字状文が施される。薄手で焼成は良好。口唇部内側にも連続刻目文を施すものがある。

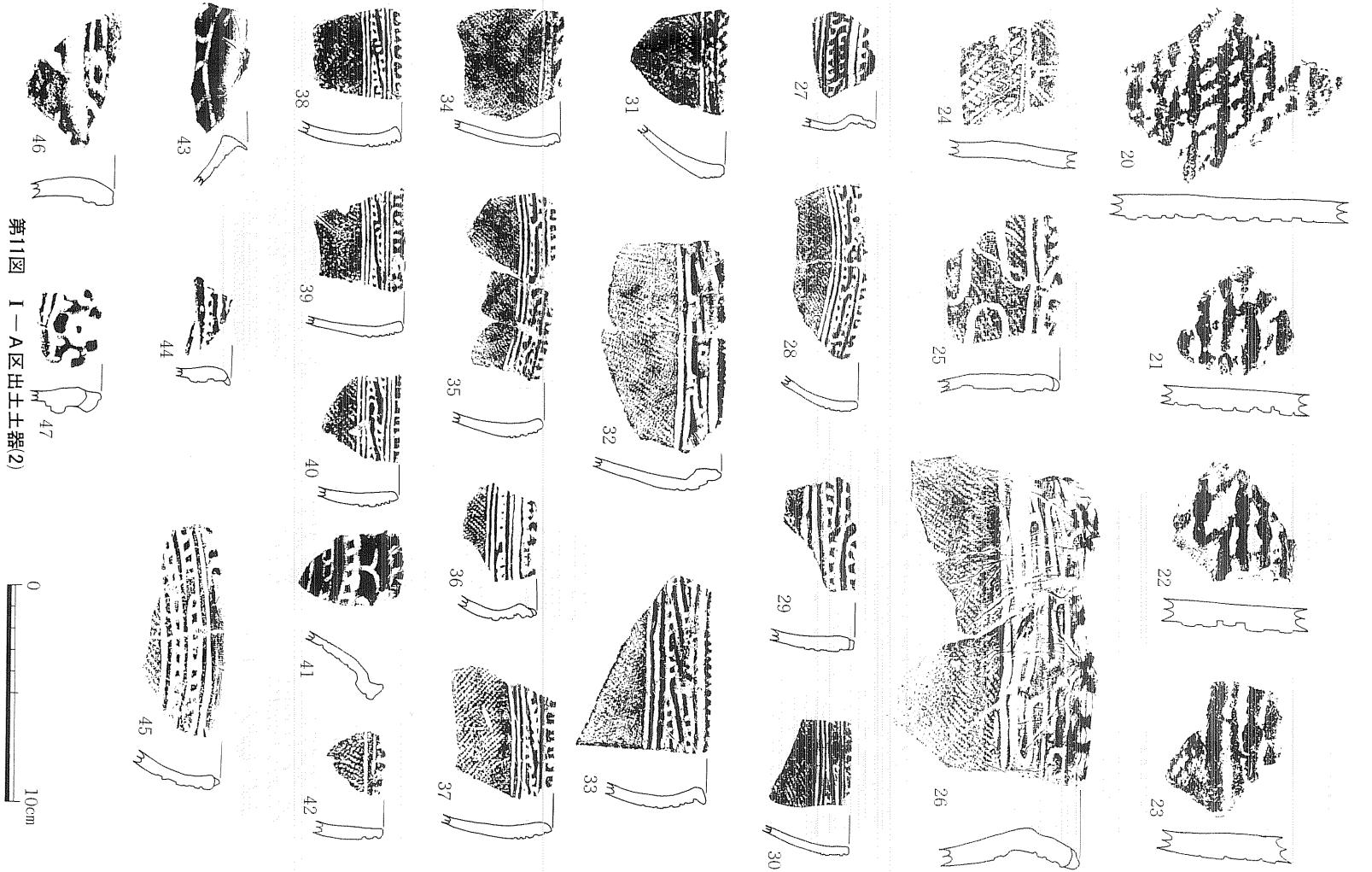
209は台付土器で胴上部にはx字状文が、下部には単節の斜繩文(LR)が回転施文されている。それらの間は二条の平行沈線によって区切られている。174も台付土器であるが、台の付け根付近までx字状文が施されている。

第19類土器 (第11図42, 第12図54, 55, 59, 60, 62, 69, 73, 75~80, 82, 第13図83, 85 87, 89~91, 97~99, 101, 105, 106, 108, 109, 111, 112, 116, 117, 119, 第14図120~130, 132, 138, 140~142)

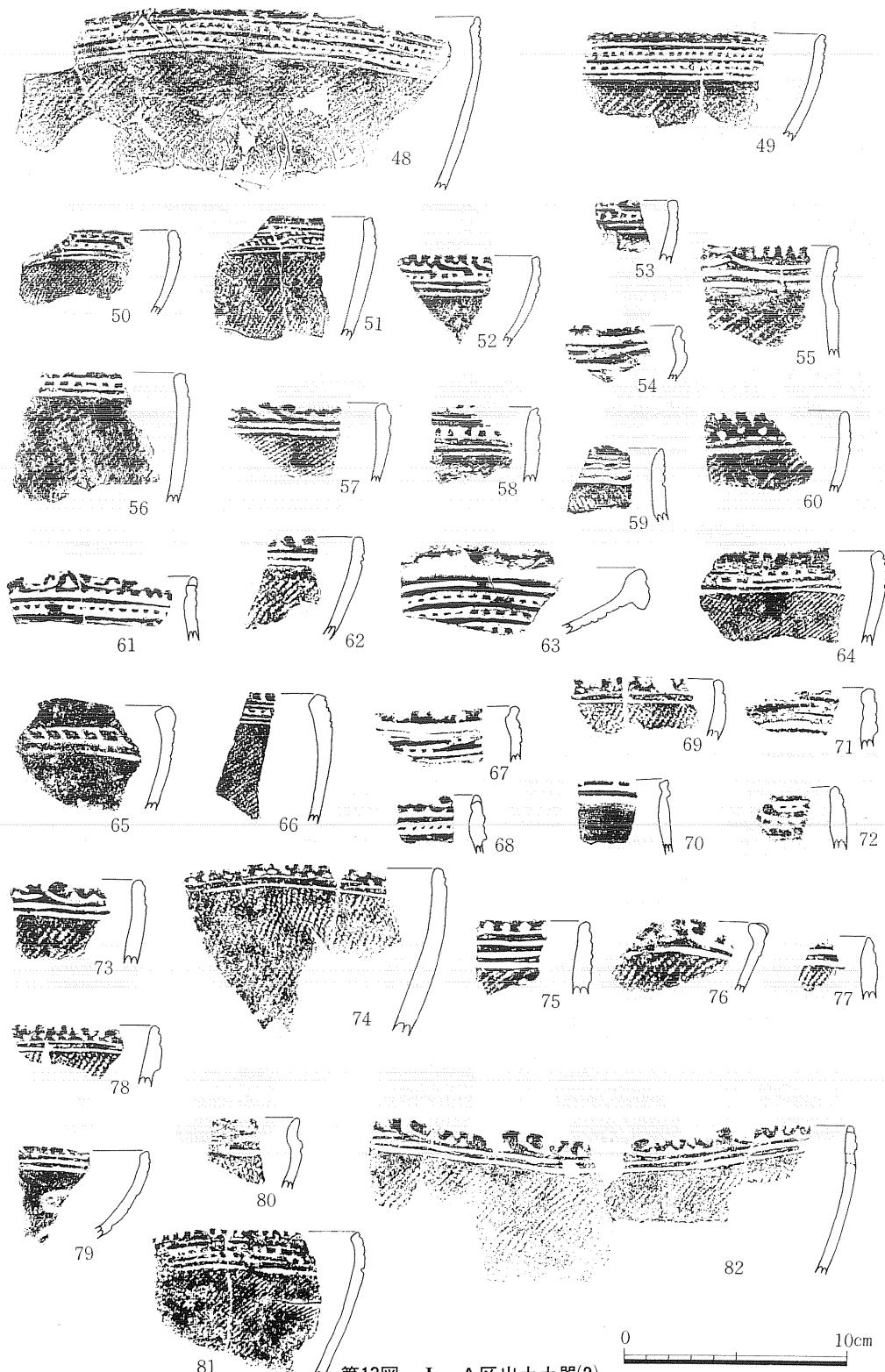
器形は小波状口縁または平縁を持つ内反するが、やや口頸部にくびれる深鉢形土器である。この類の特徴は口縁部文様帶が二ないし五条の平行沈線文によって区画されていることである。

第10图 I-A区出土土器(1)

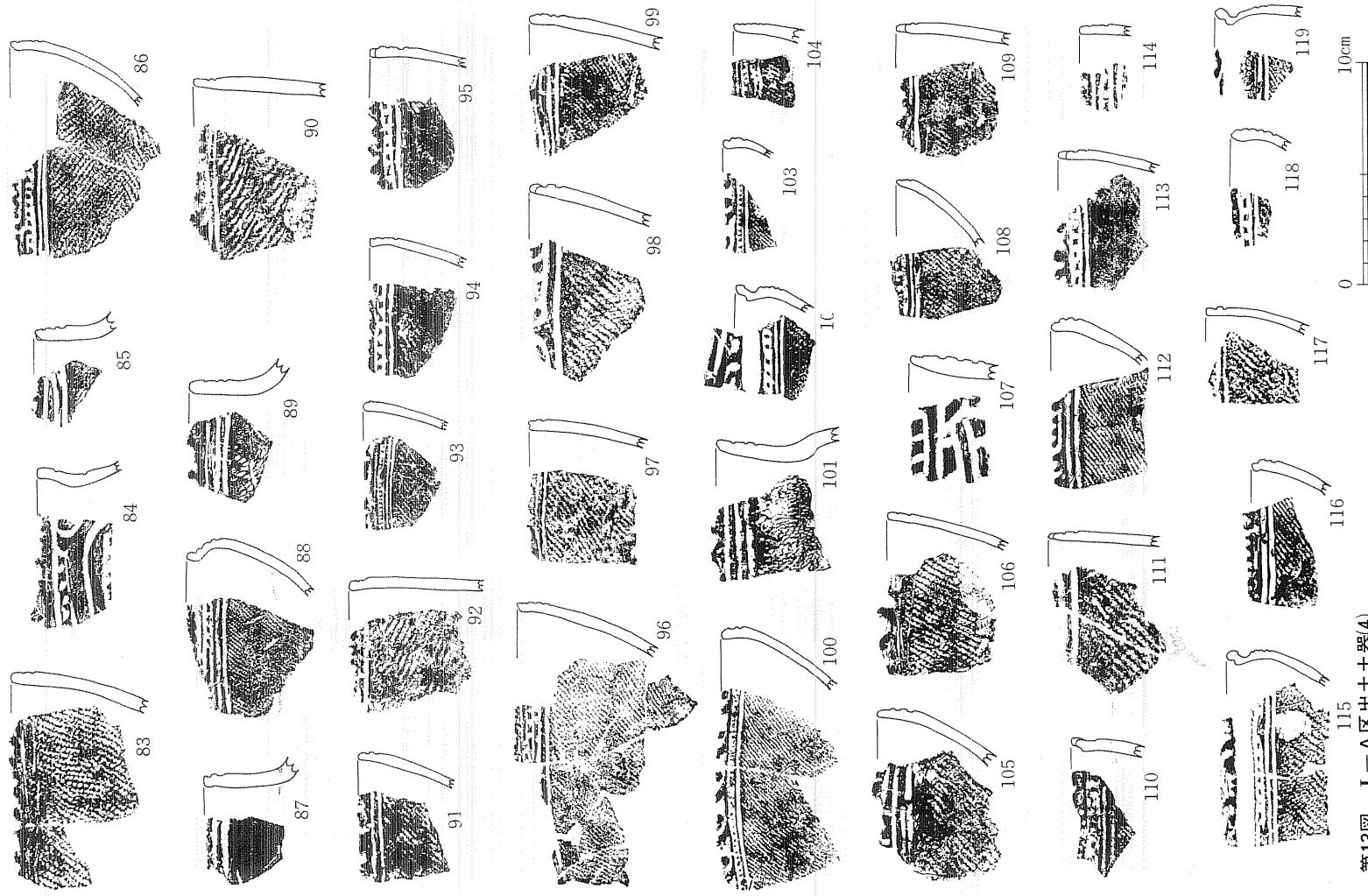




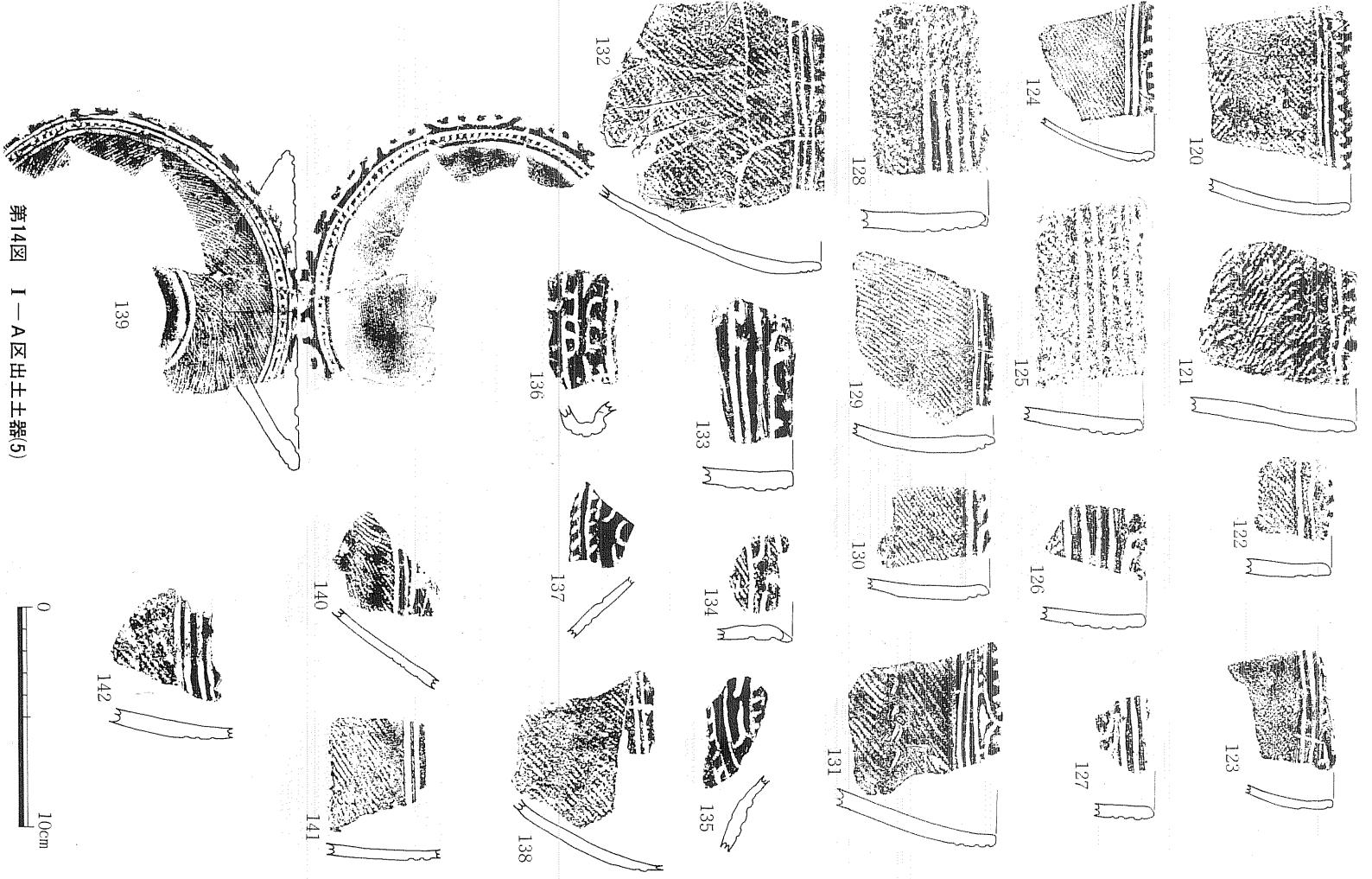
第11図 I-A区出土土器(2)



第12図 I-A区出土土器(3)

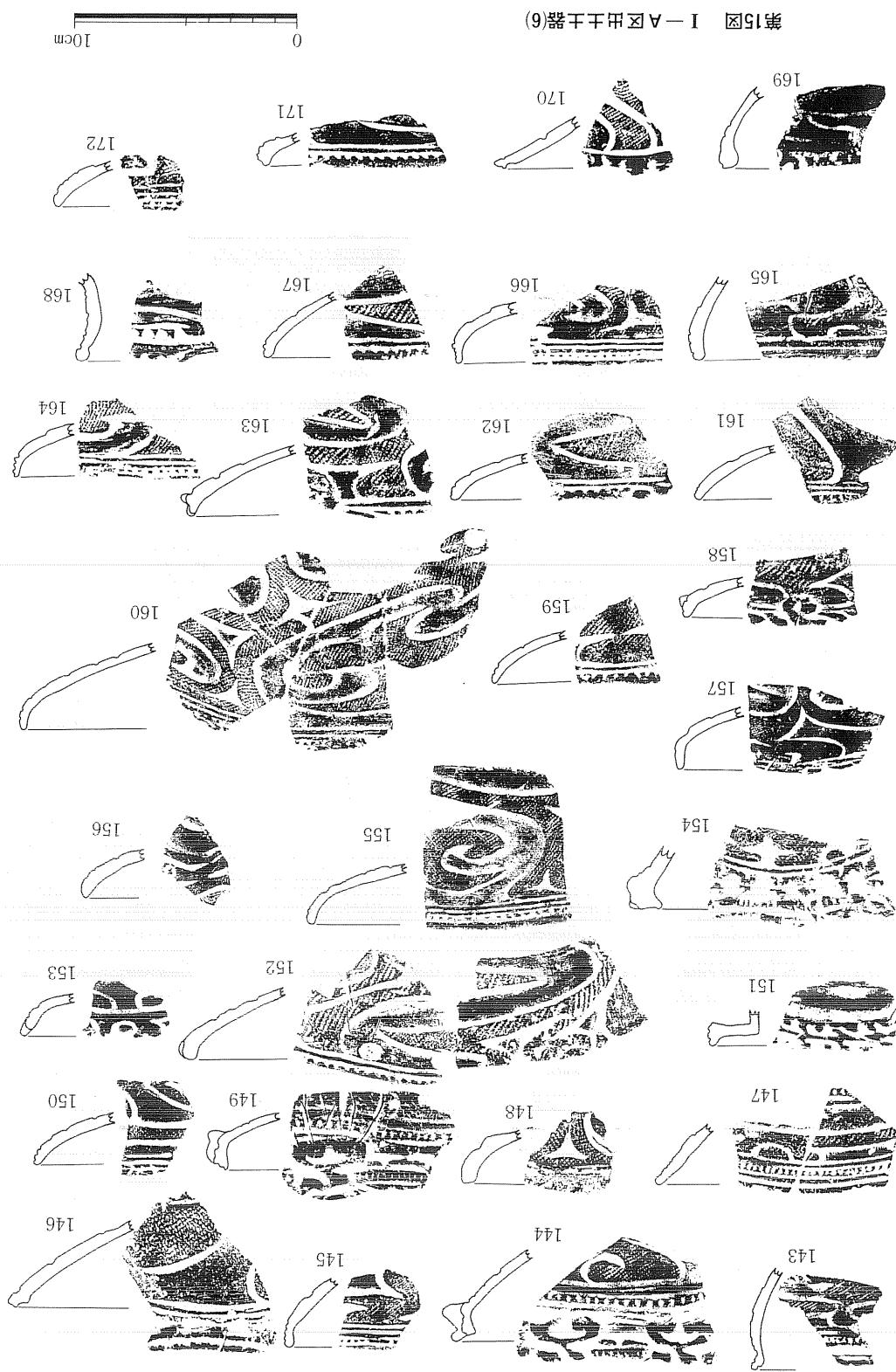


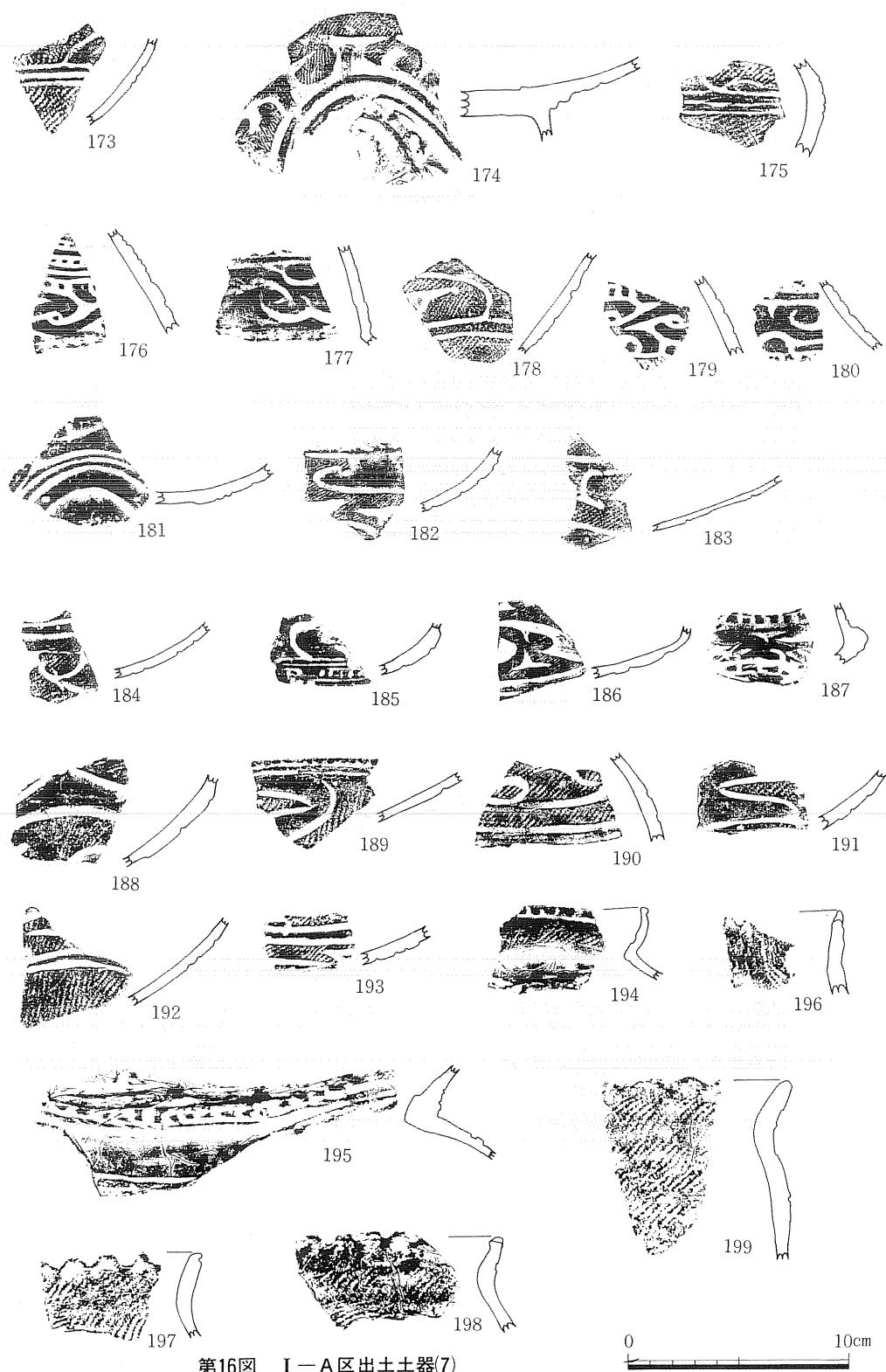
第13図 I—A区出土土器(4)



第14図 I-A区出土土器(5)

第15图 I-A区出土工具(6)

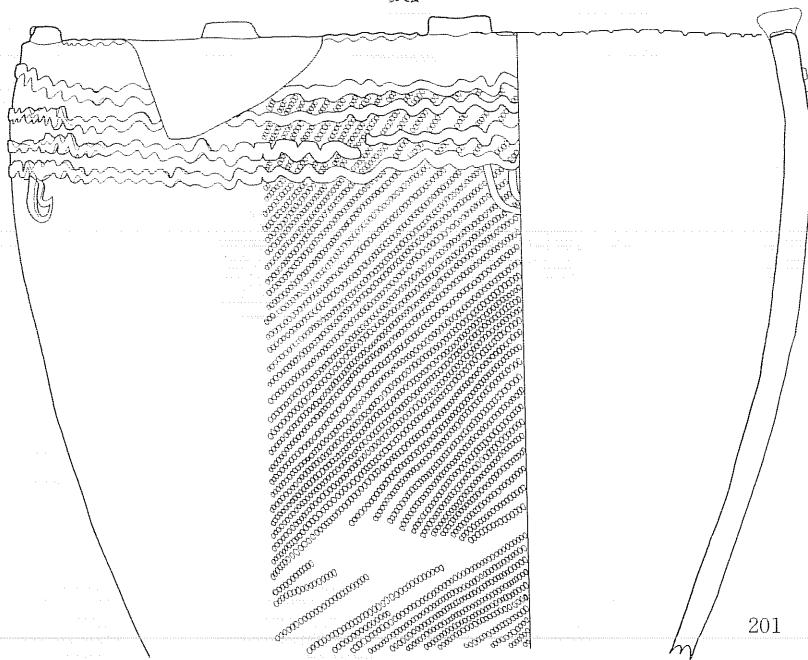




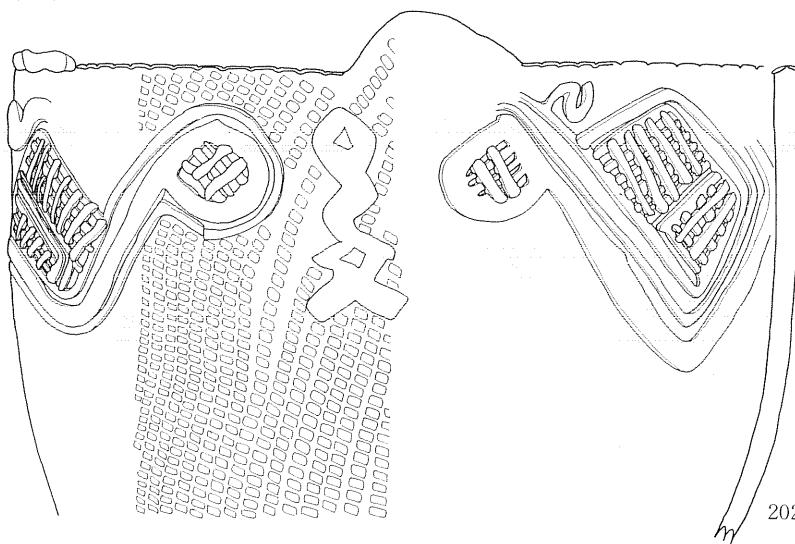
第16図 I-A区出土土器(7)



200



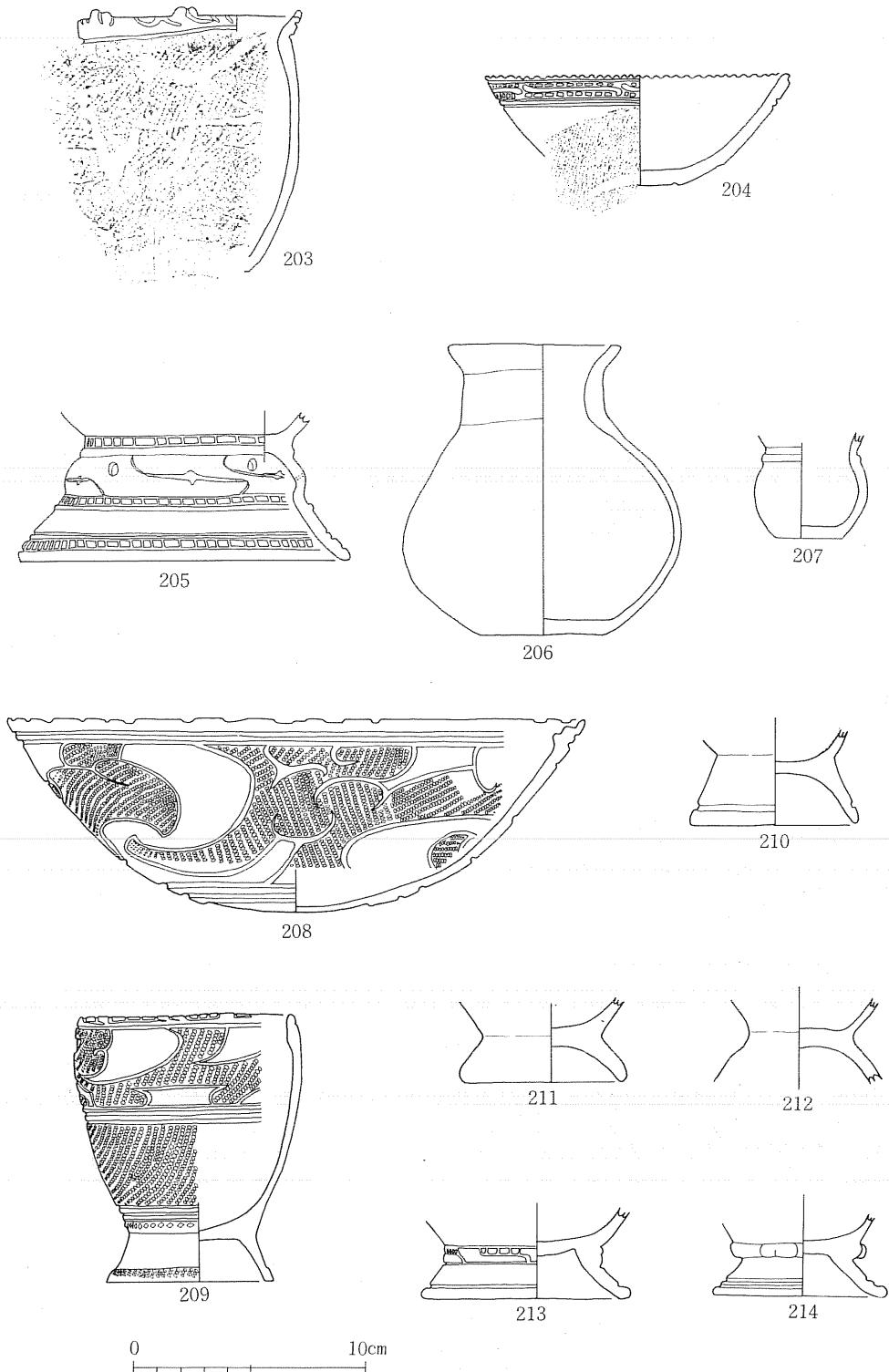
201



202

0 10cm

第17図 I-A区出土土器(8)



第18図 I-A区出土土器(9)

一部に厚手の粗製土器(125, 128)もあるが、大部分は半粗製（文様を入れている点で精製ではあるが、一般的の用途としては粗製土器同様に扱われたと考えられる。煮炊きの痕が見られる。）の土器である。単節の斜縄文を体部に横位に回転施文しており、ほとんどLRであるが、少々RLのもの（90, 91, 121）もある。一片だけであるが羽状縄文を施したもの（120）もある。

以上、梨ノ木塚遺跡I-A区出土の土器について述べたが、第4～7類は縄文前期、第16～19類は晩期のものである。出土数は晩期のものが70%を占める。

晩期の土器はNC54, ND54に集中して出土するが、前期のもので、第5類土器はNB53, NC53, 第6類土器はND55と少々ずれて集中して出土する。

## 口石器

I-A区で遺構外から出土した石器は石鎌35, 石錐6, 石匙18, 石箇77, 搔器20, 石槍7, 打製石斧9, 磨製石斧4, 凹石2, 石剣1, その他10の総計189点である。

### 石鎌（第19図1～20 図版16）

出土した石鎌は基部の形状により①直線に近いもの（1～4）、②中央がわずかにくぼむもの（5～17）、③凸出しているもの（18～20）に分けられ②が圧倒的に多い。これらの石鎌には主要剥離面をわずかに残すものもあるが、ほとんどは両面からのていねいな押圧剥離によってきれいに仕上げられている。最大のものは5, 16で5.5cmを計り、18の基部にはアスファルトが付着している。

### 石錐（第19図21～23 図版16）

23は頭部と錐部とが明瞭に区別できるが、21, 22は境がはっきりしない。断面は菱形か三角形に近い。

### 石匙（第19図26～35 図版16）

つまみの位置によって横型（26～28）と縦型（29～35）に分けられるが後者が多い。縦型のものはやや整った剥片ないしはゆるく「く」の字形に曲った剥片を利用したものが多く、つまみの箇所以外は主要剥離面をそのまま残すものが多い。26は赤色で、これで完形である。

### 石箇（第20図36～41 図版16）

部厚い石刃状の剥片を利用したものが多く、ほとんどが主要剥離面を残し、約半分ほどはこれに剥離を加えないもので、これらはエンドスクレーパー的な要素を持つものと思われる。

### 搔器（第20図42, 43, 45, 46, 64 図版16, 17）

搔器として機能する部位の形状が弧を描くものと（42, 43, 63）、直線的なもの（45, 46）がある。

### 石槍（第21図49～53 図版17）

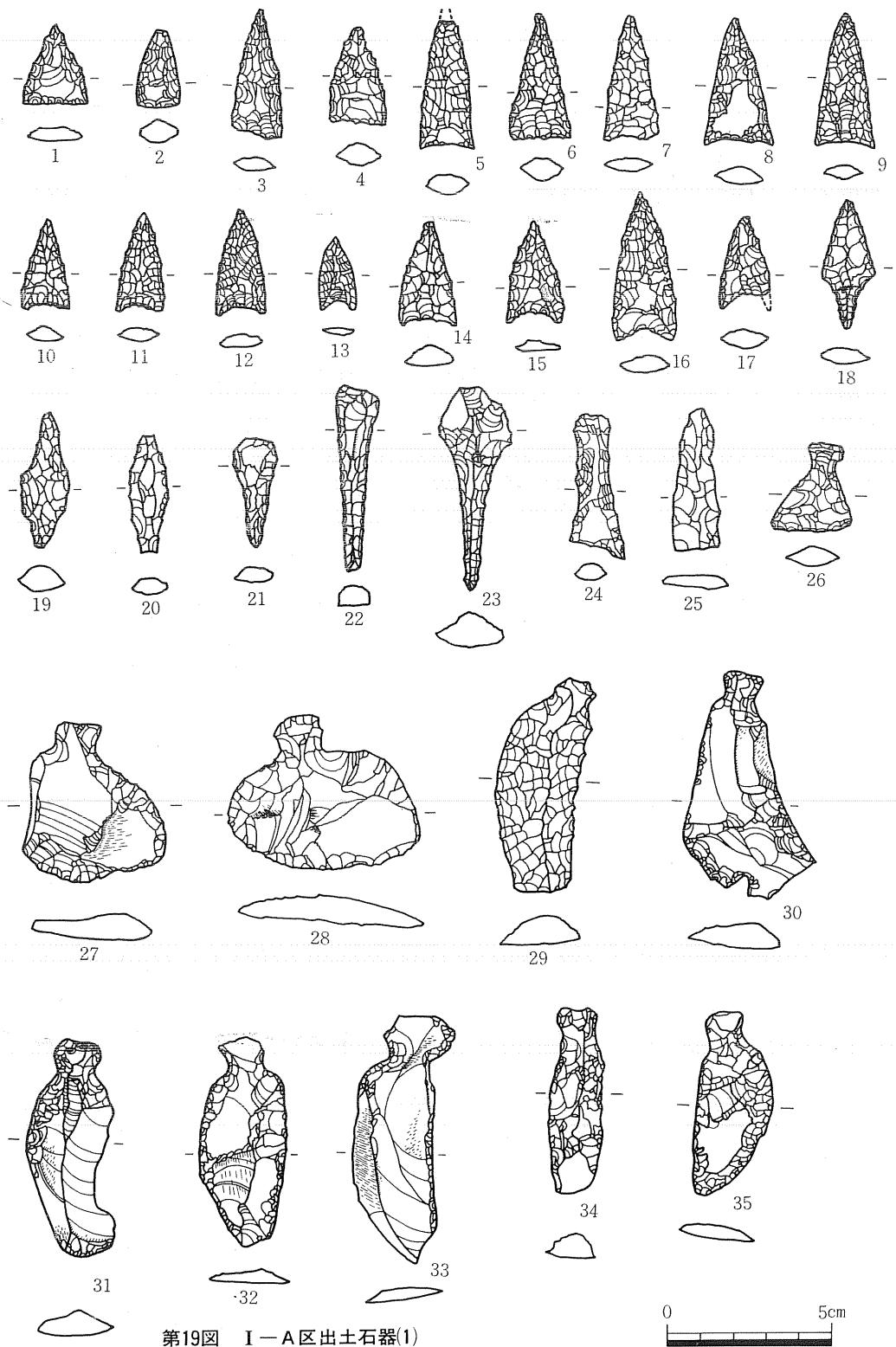
幅広で大型、木葉形のものが多く、ていねいな作りである。53はやや離れた地点からの出土であるが接合した。長さ17.5cm、最大幅6.6cmを計る。

石斧（第21図54～58、第22図59、60 図版17）

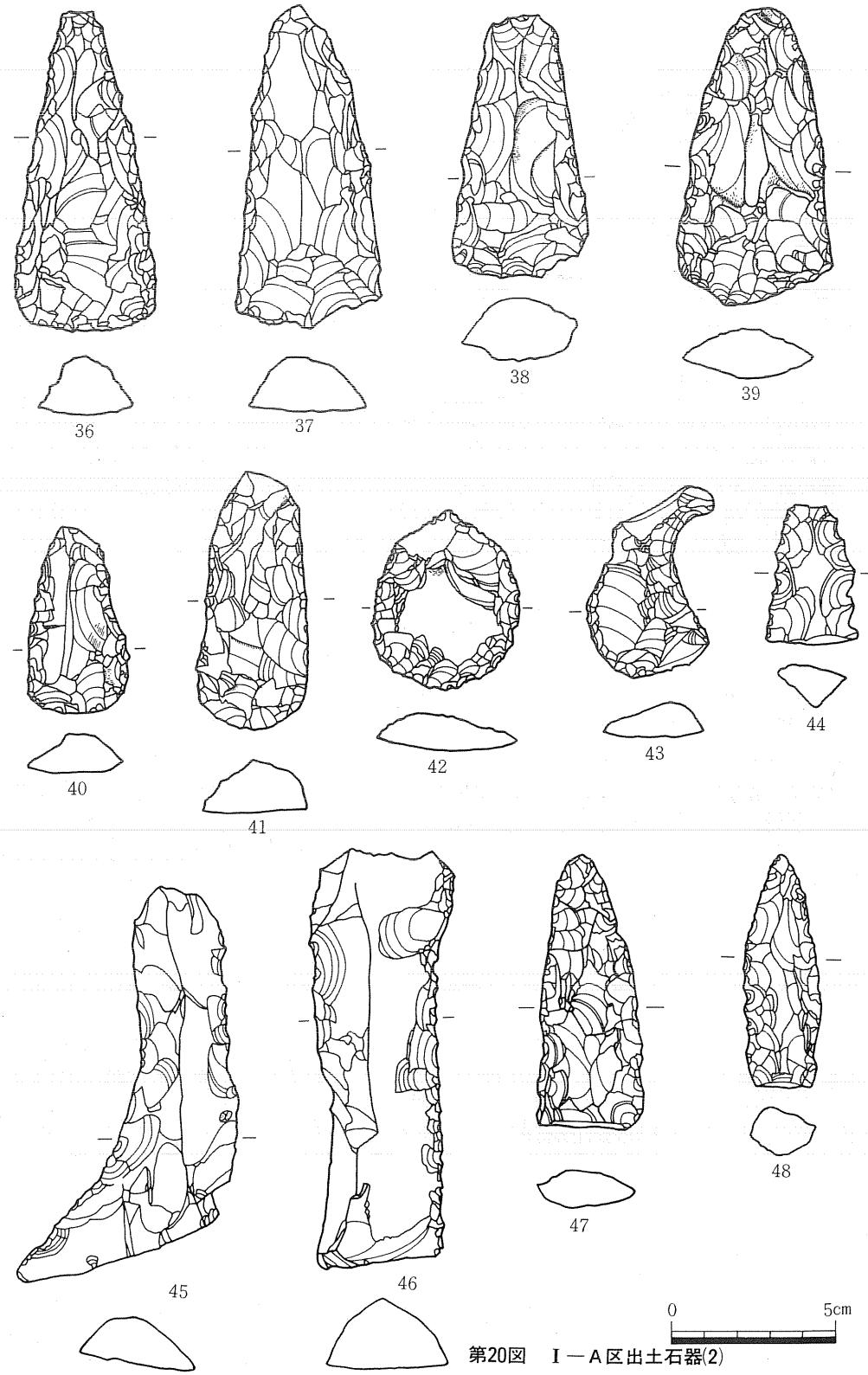
磨製石斧（54～56）は刃部が欠損している。打製石斧（57～60）では刃部の欠損は見られず57、60は自然面を残す。60は全長24cmの大型。

石劍、石皿（第22図61、62 図版17）

石劍は別々に出土したが接合した。

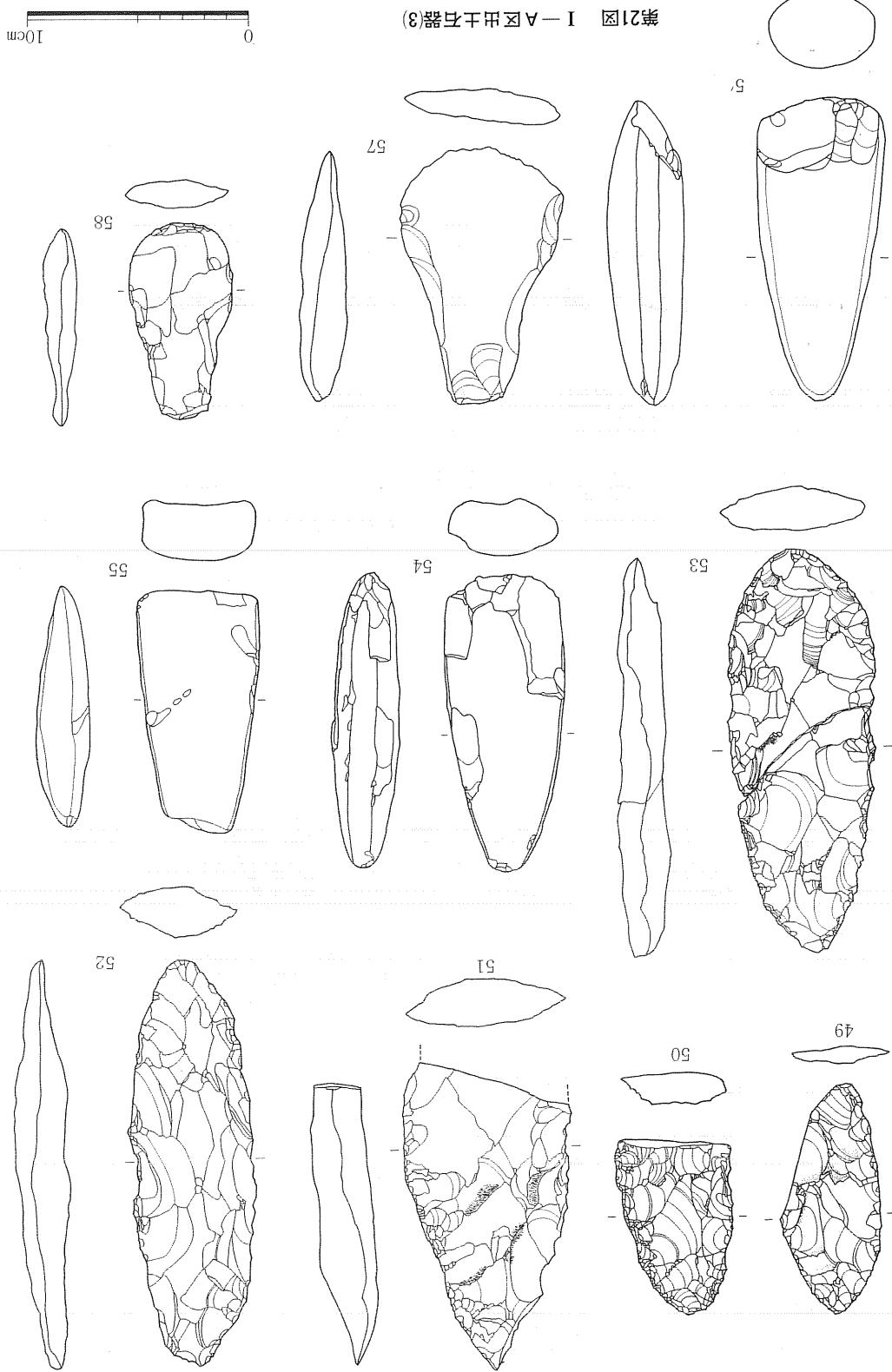


第19図 I-A区出土石器(1)



第20図 I-A区出土石器(2)

第21圖 I-A區出土石器(3)





第22図 I-A区出土石器(4)



1



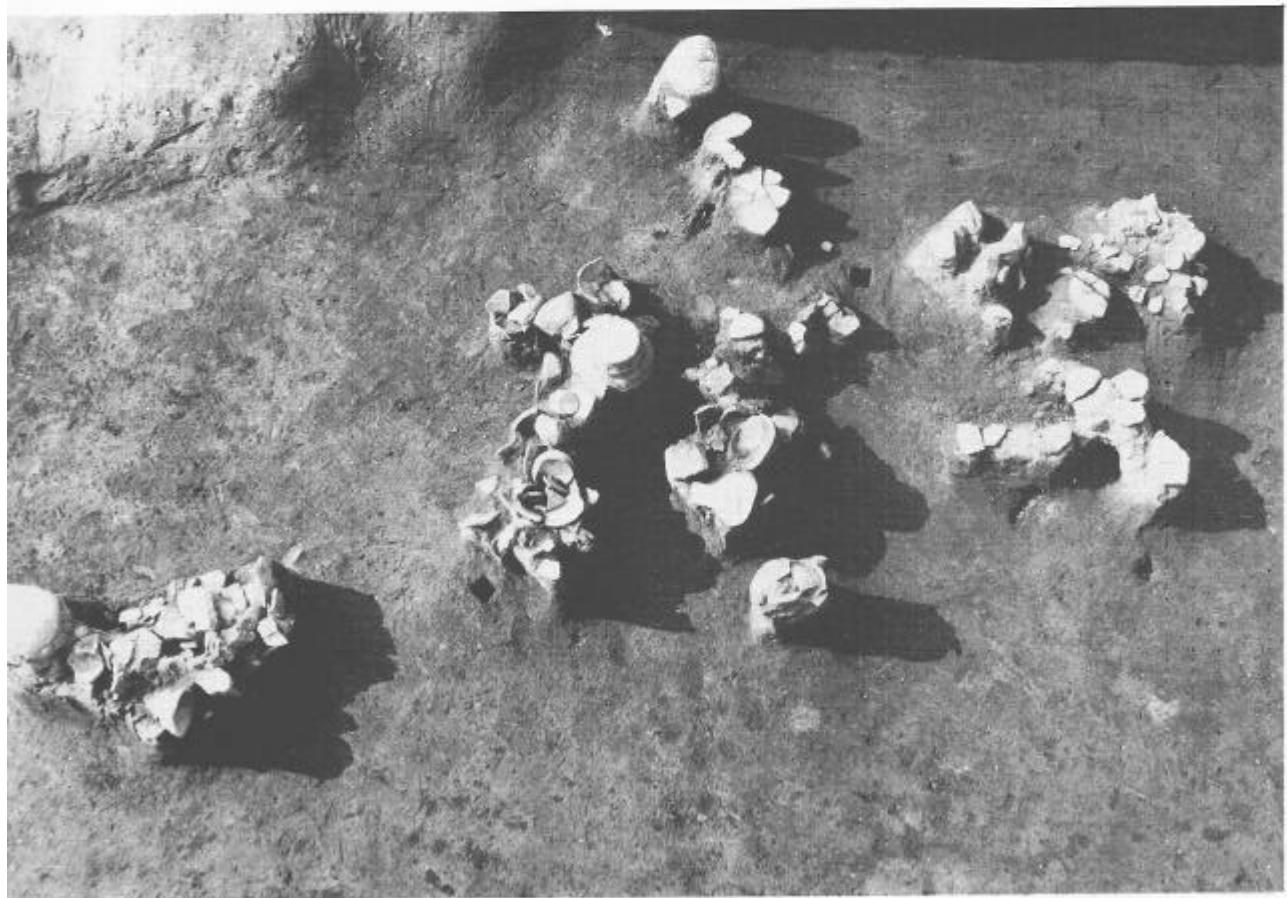
2

図版1 1 遺跡遠景（北面から）

2 遺跡近景（北面から）



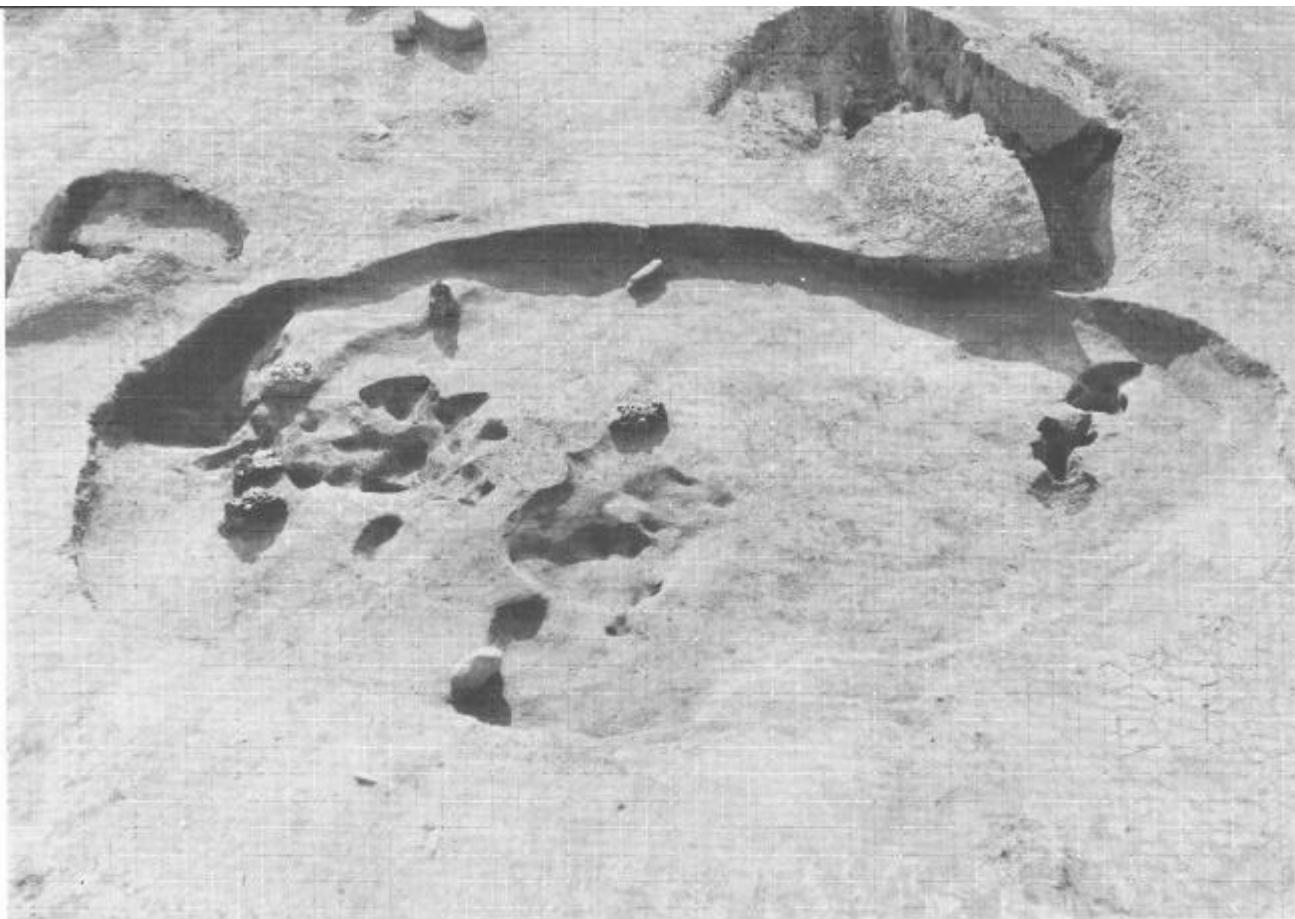
1



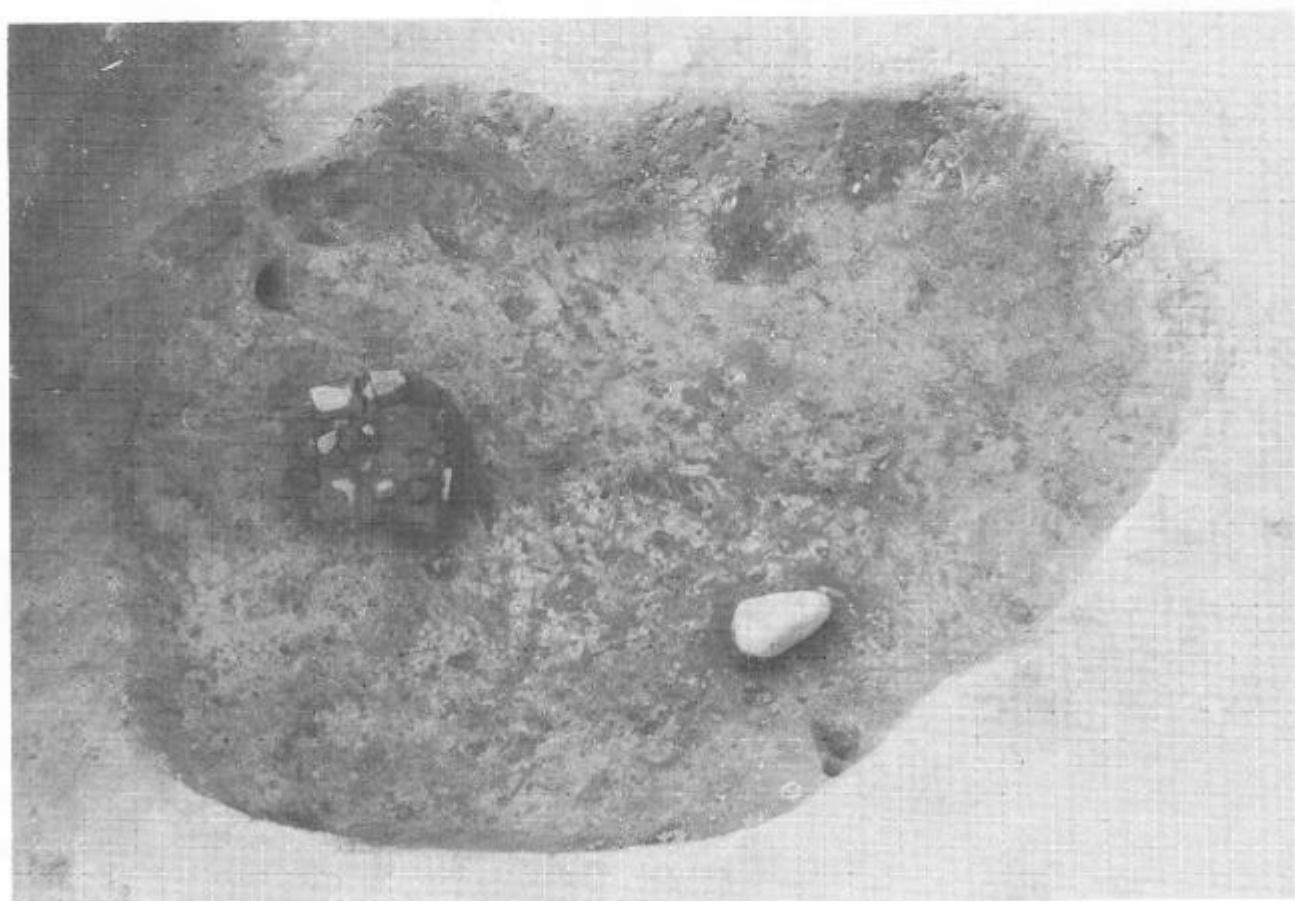
2

図版2 1 I-A区全最

2 遺物出土状況



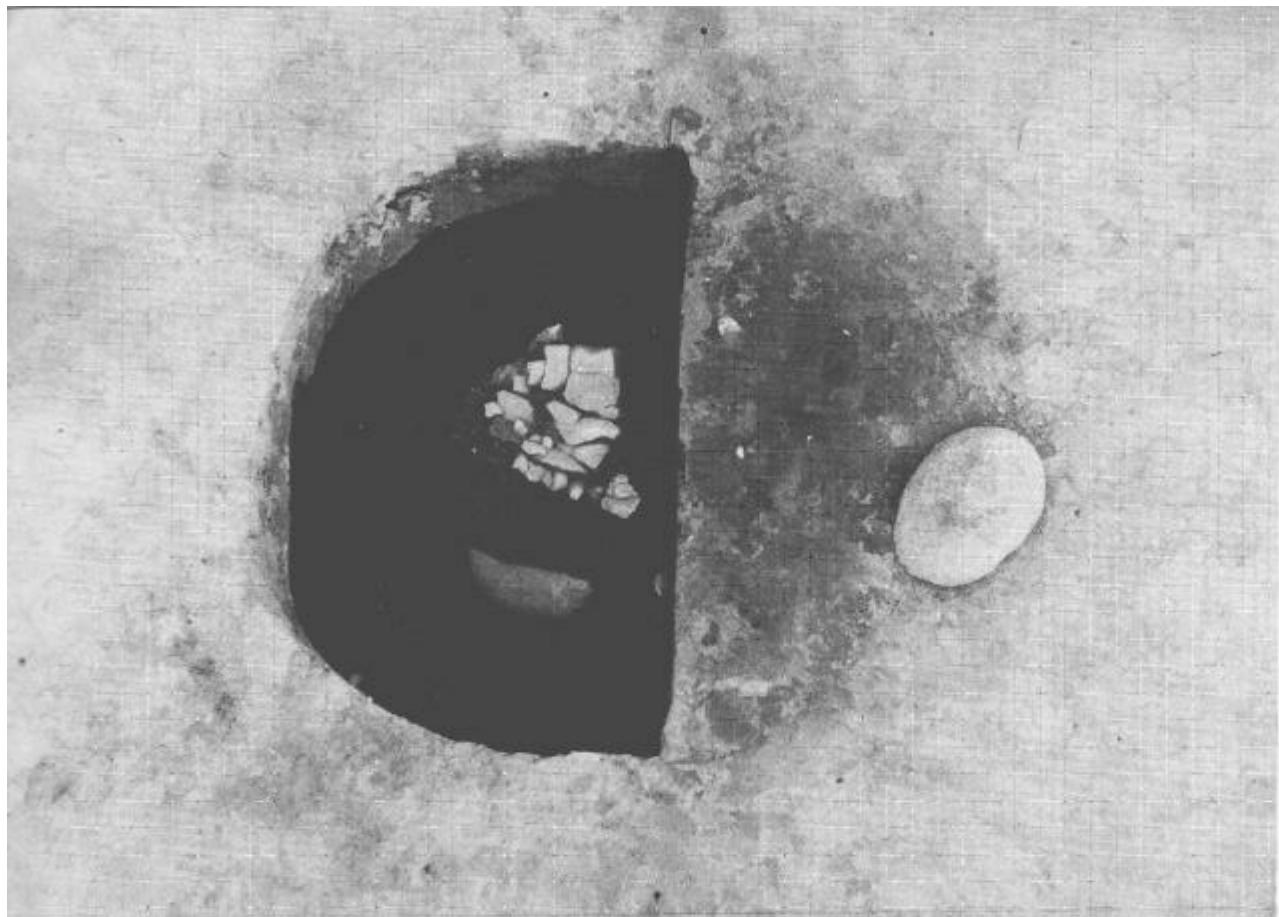
1



2

図版3 1 SX00 竪穴状遺構

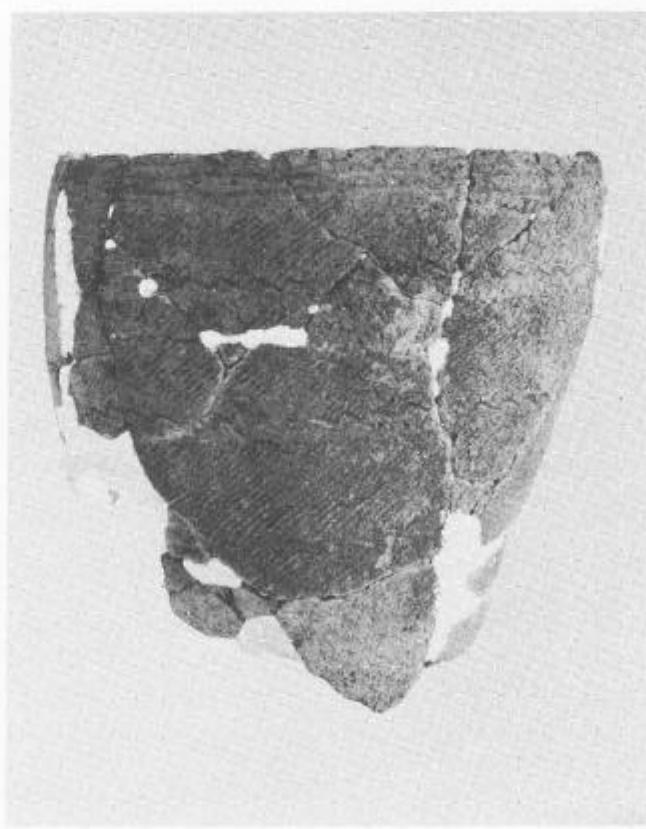
2 SK03 土壙



1



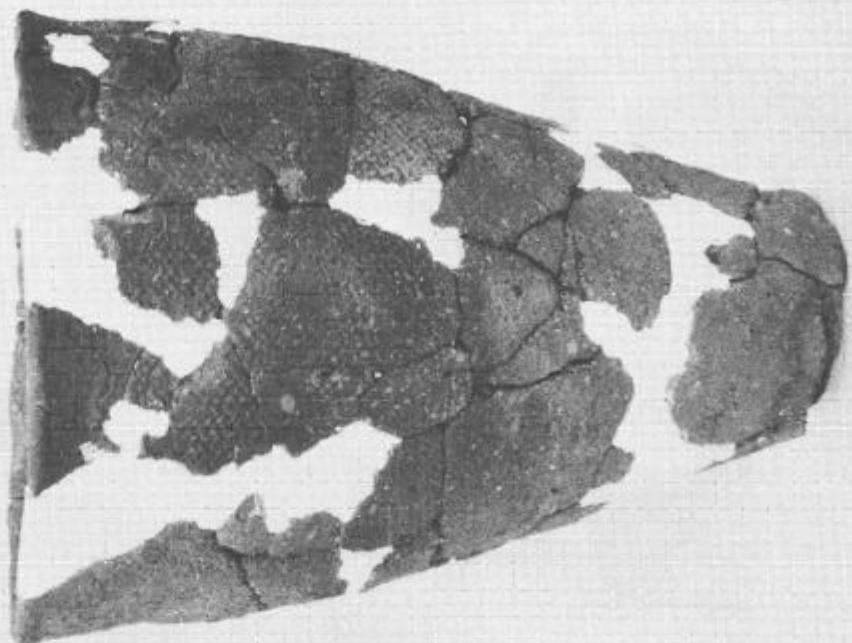
2



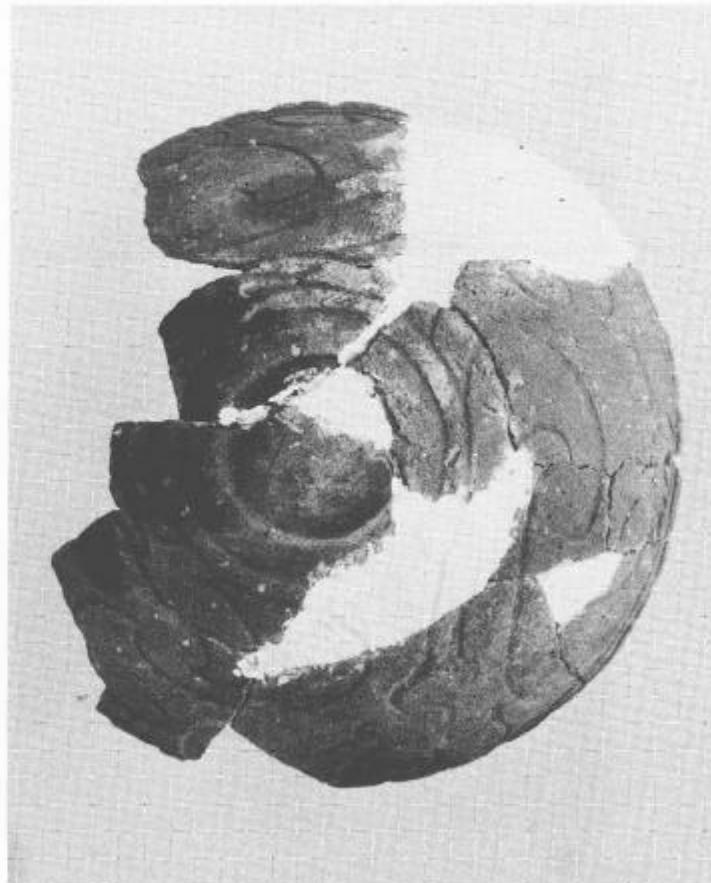
3

図版4 1 SK04 袋状土壤  
2, 3 SX00 出土遺物

1

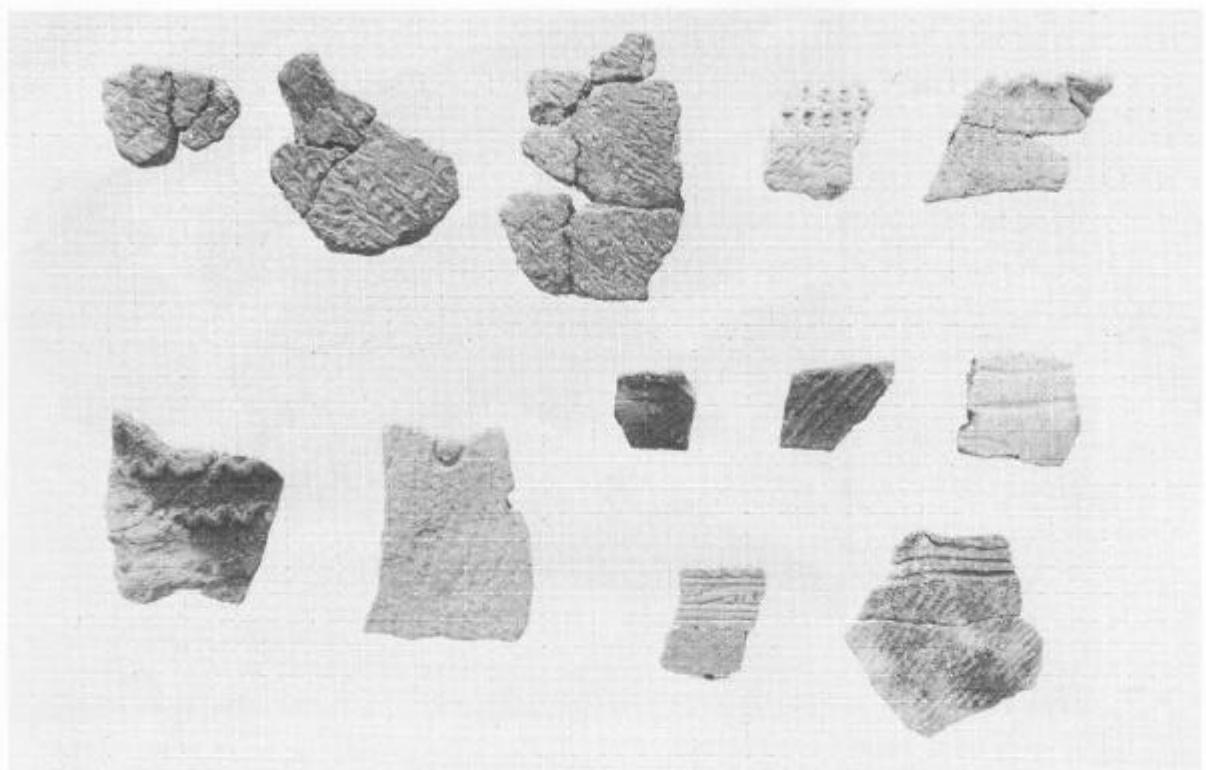


2

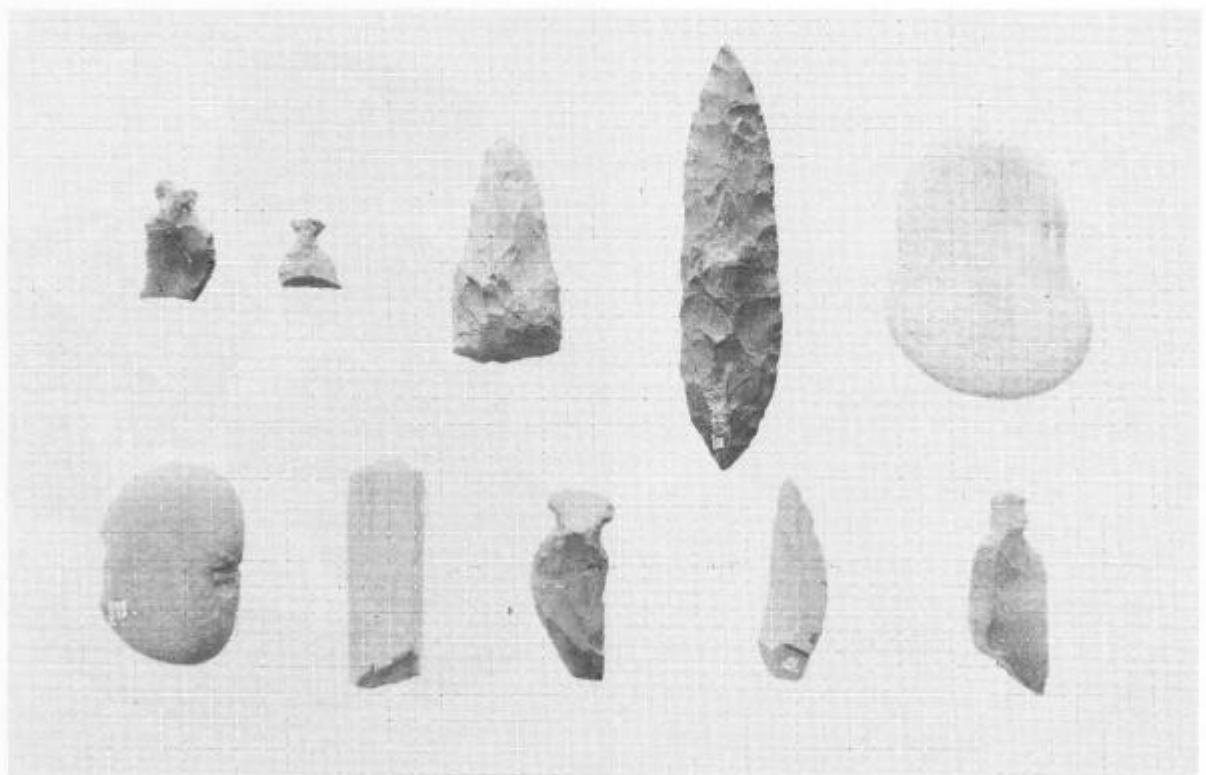


図版5 1 SK03出土土器

2 SK04出土土器



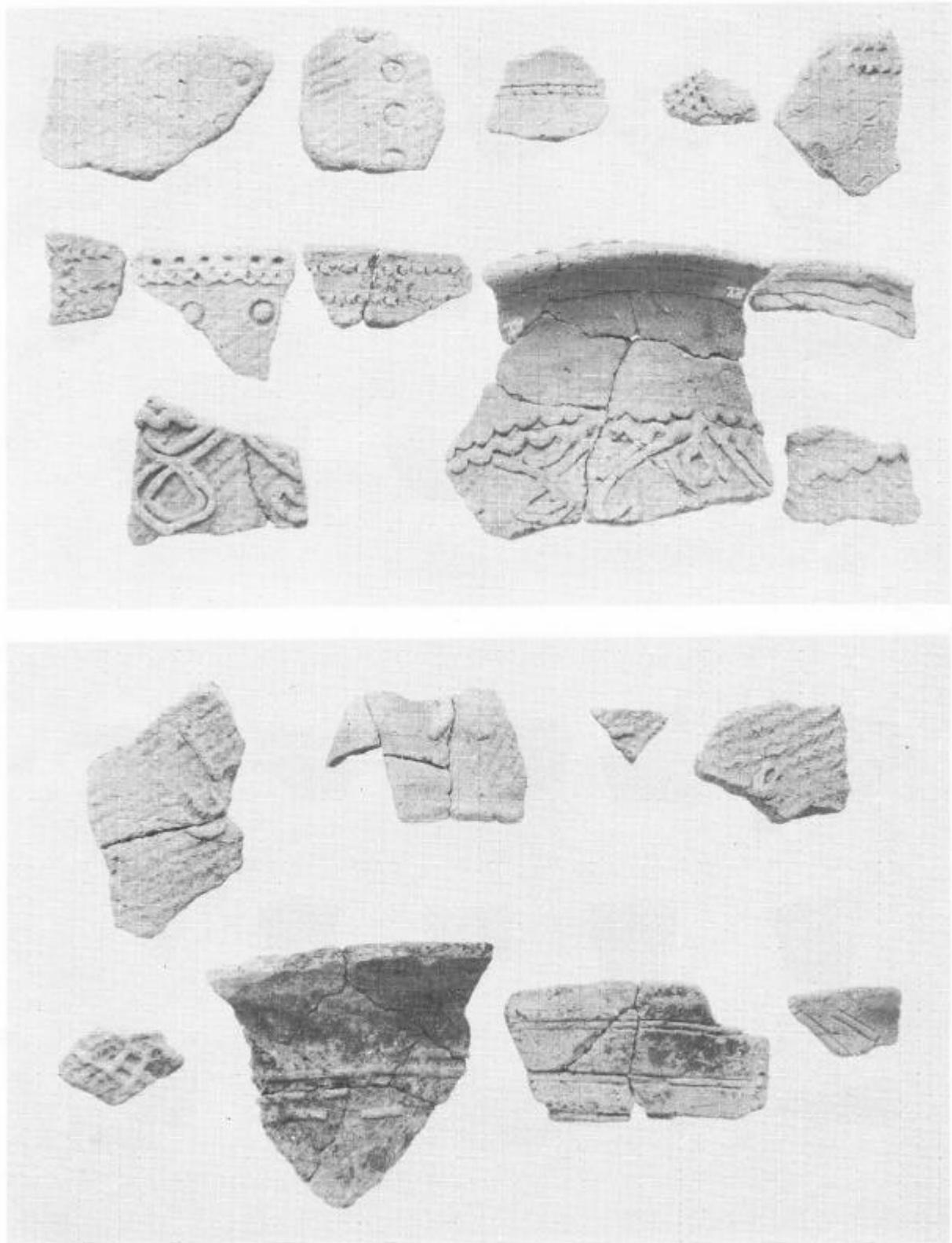
1



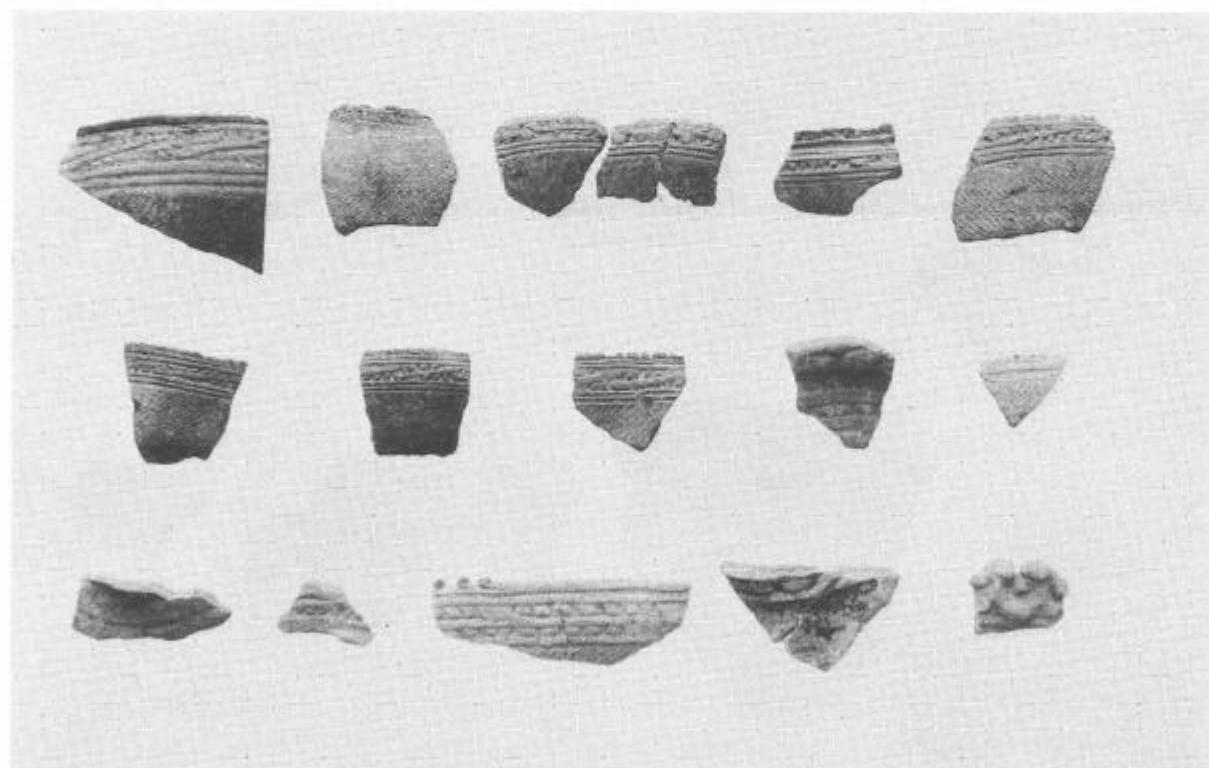
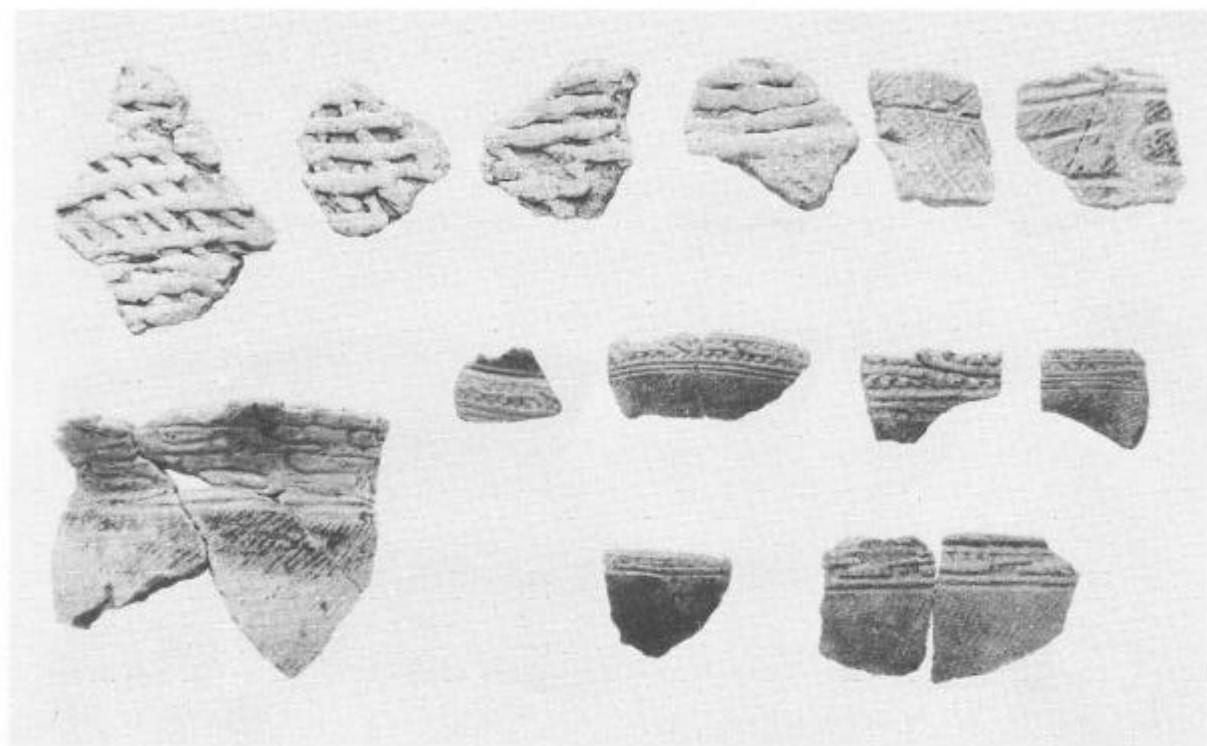
2

図版6 1 SX00, SK03, 04出土土器

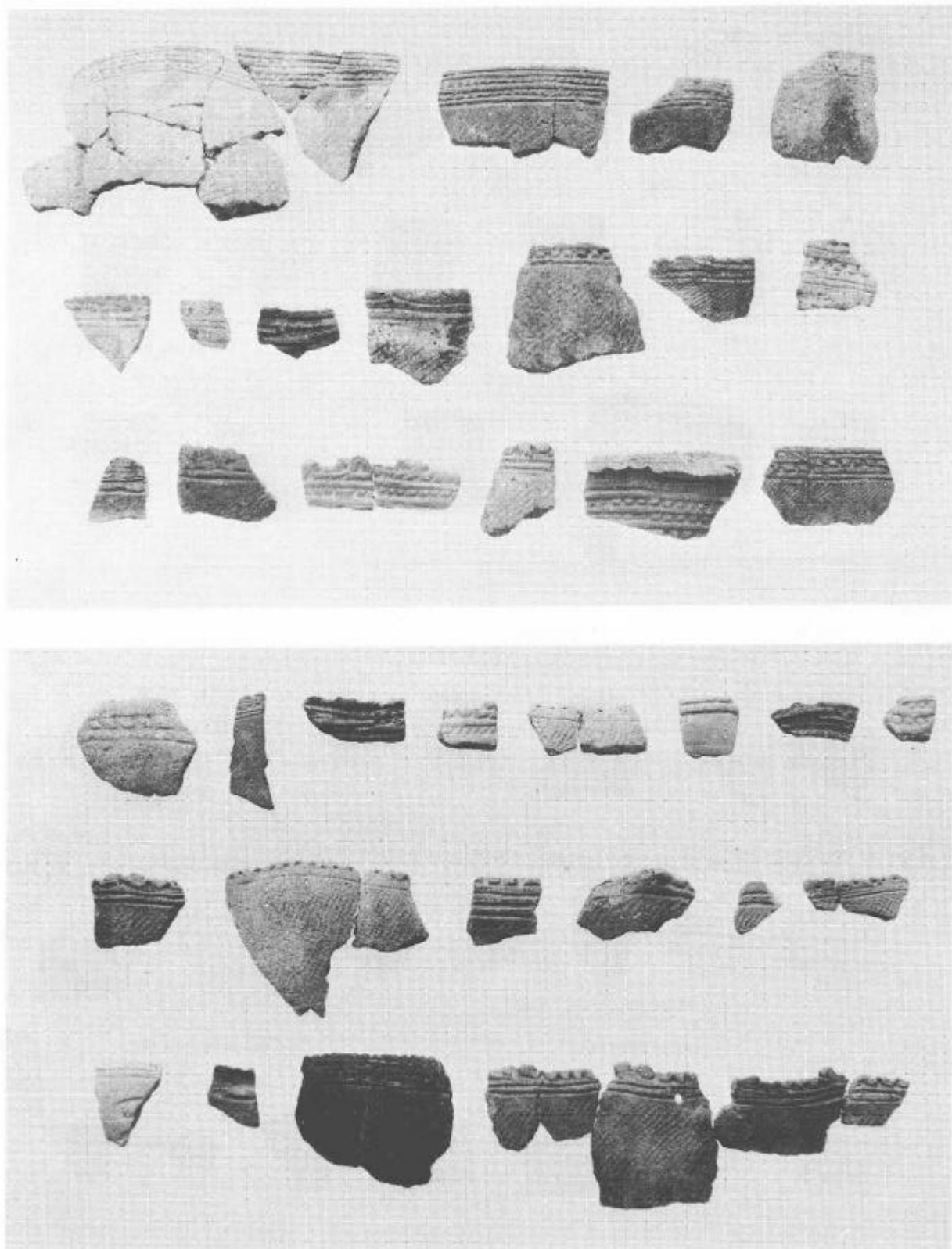
2 同上 出土土器



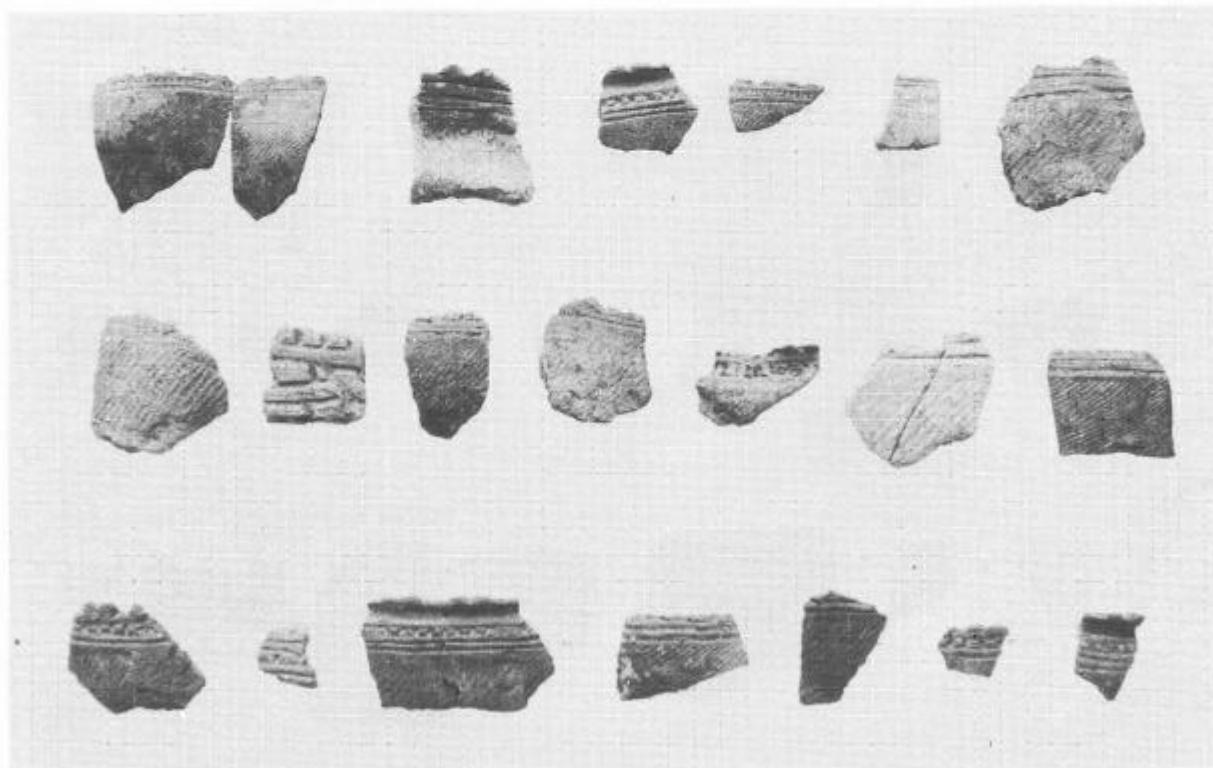
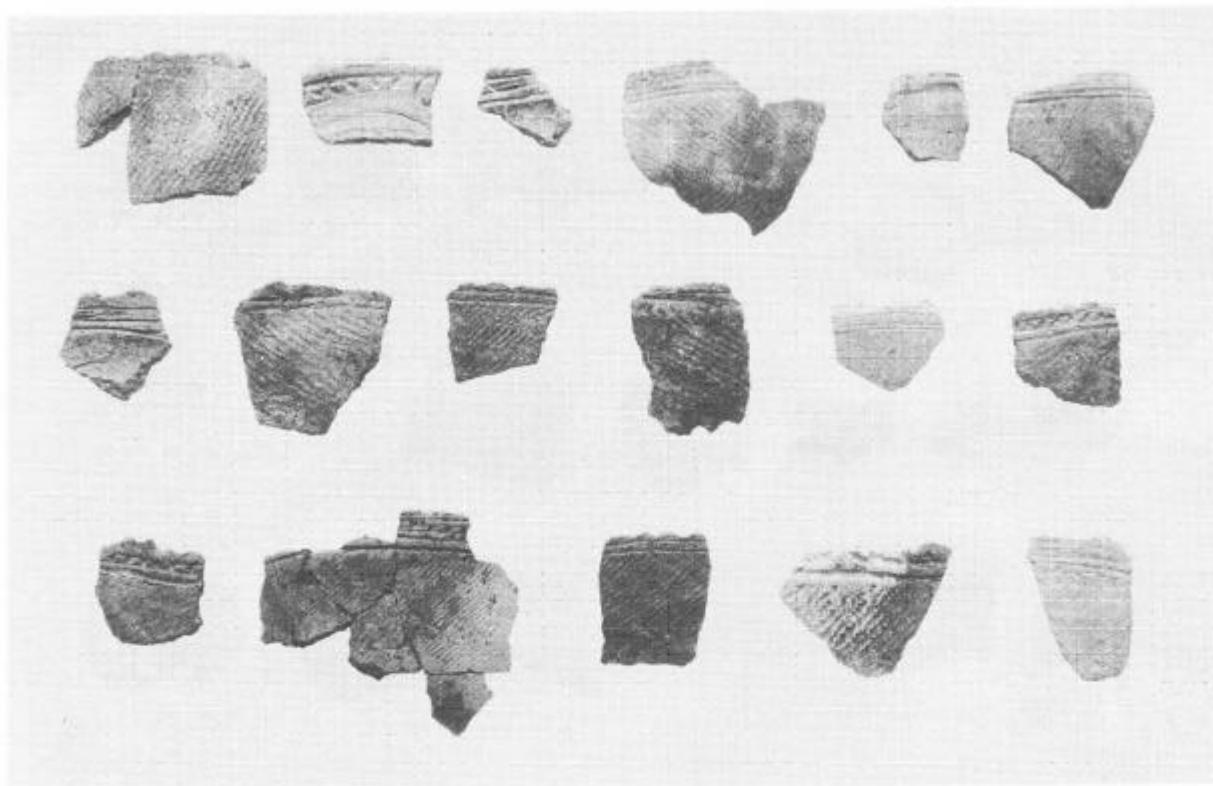
図版7 I-A区出土土器(1)



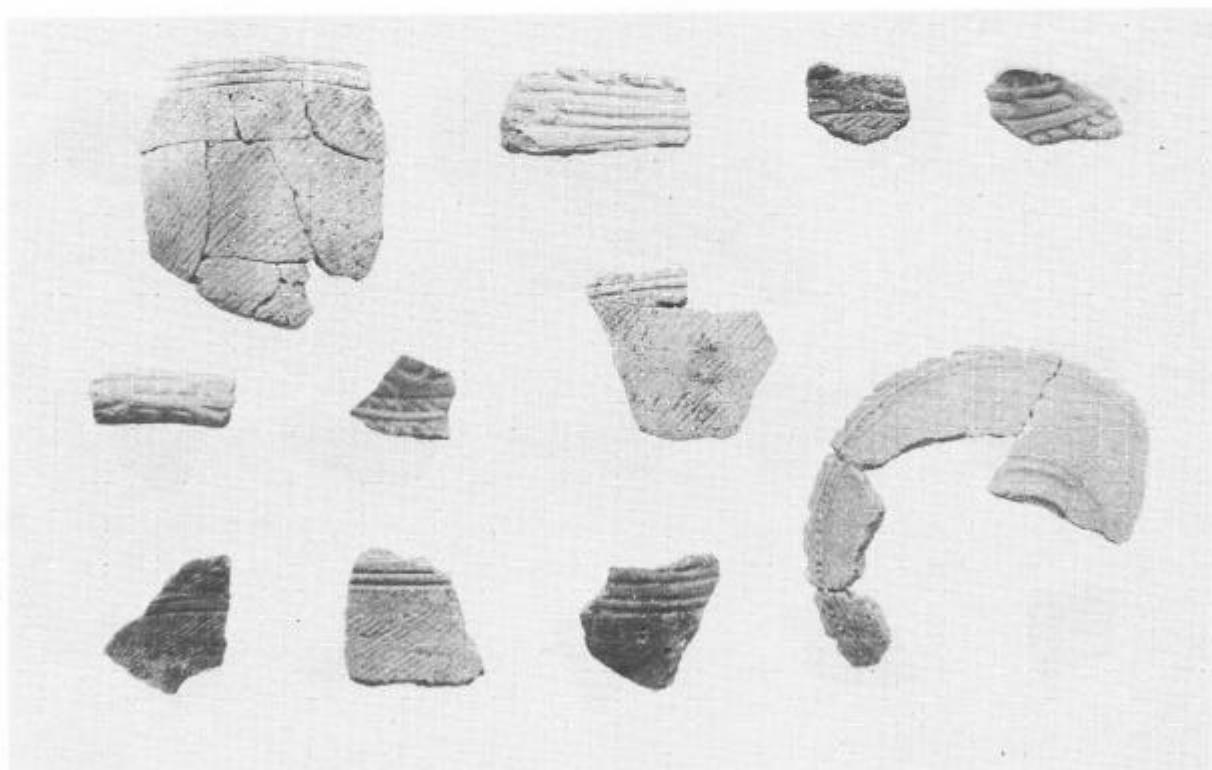
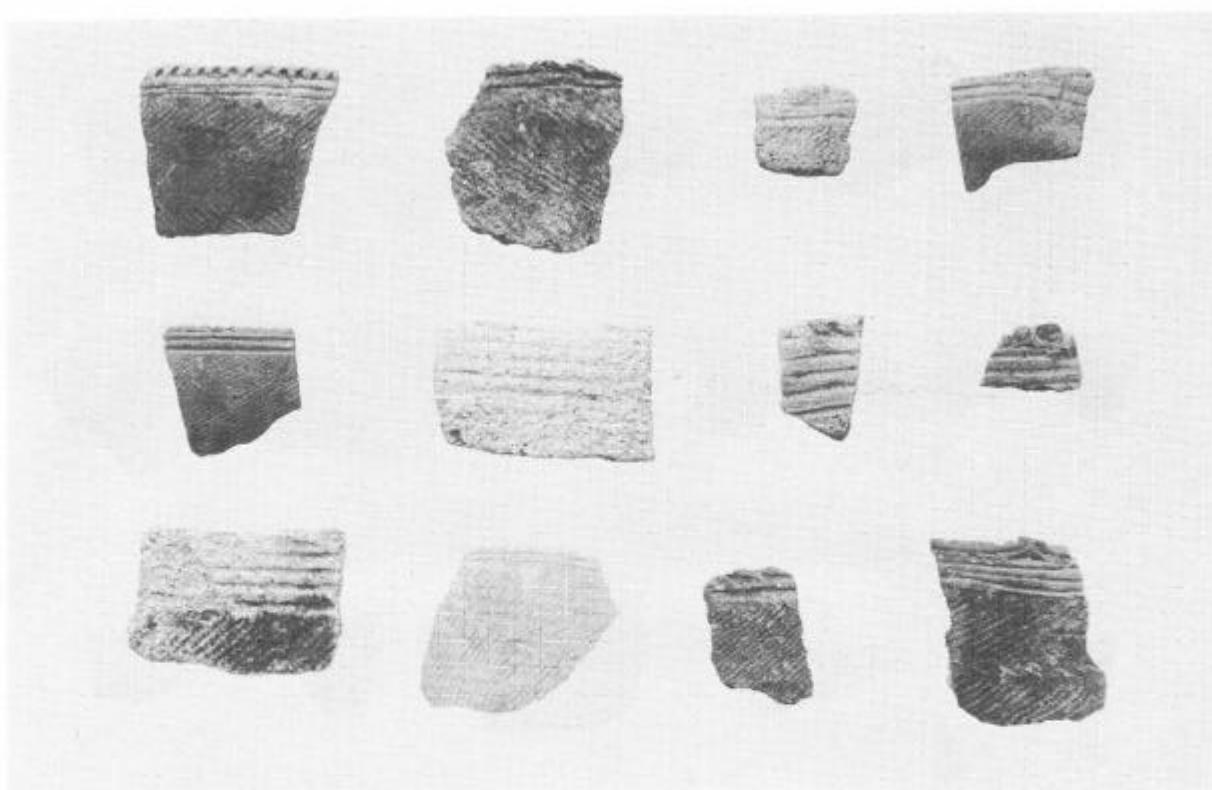
図版8 I-A区出土土器(2)



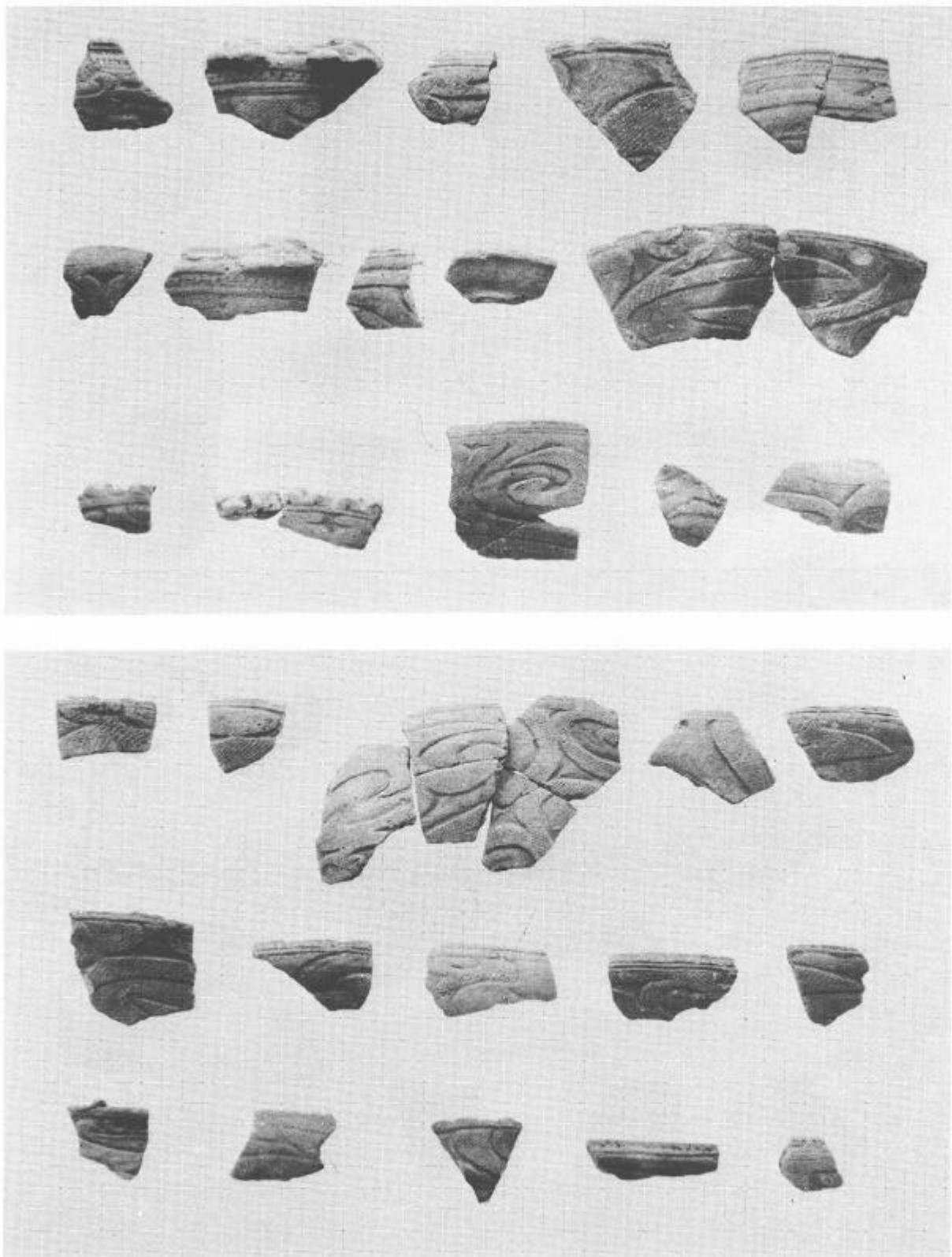
図版9 I-A区出土土器(3)



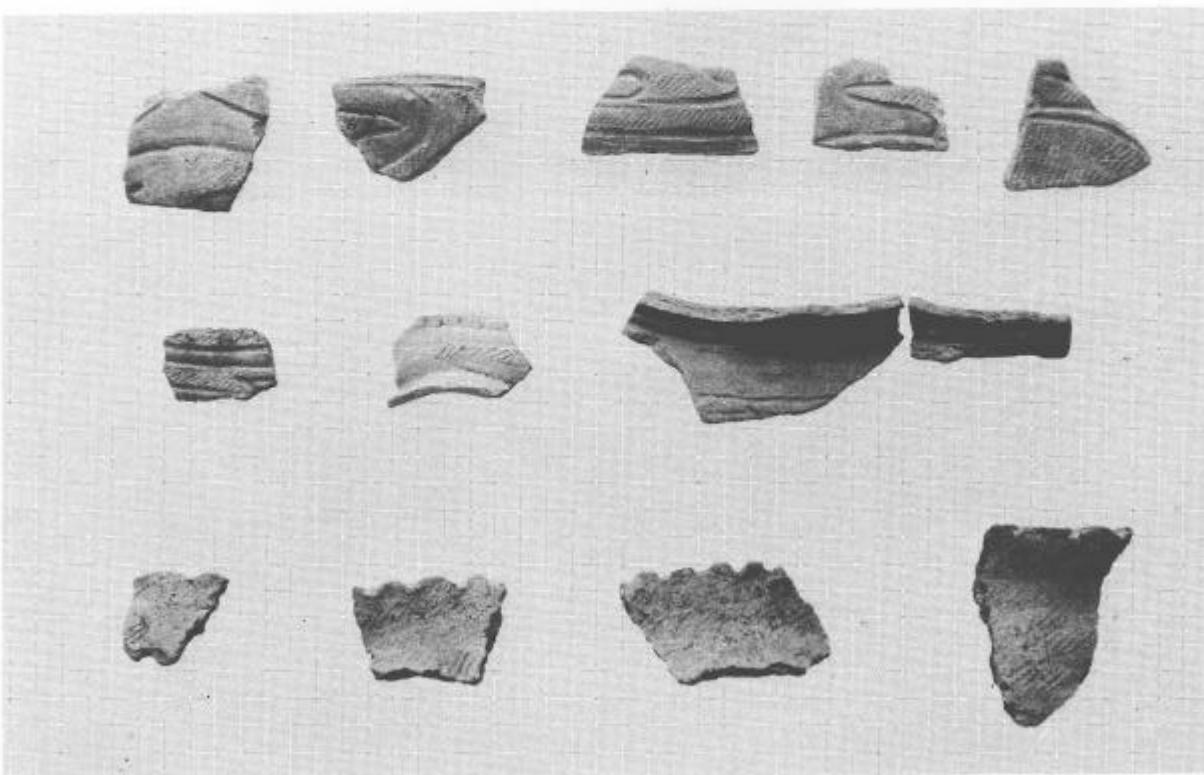
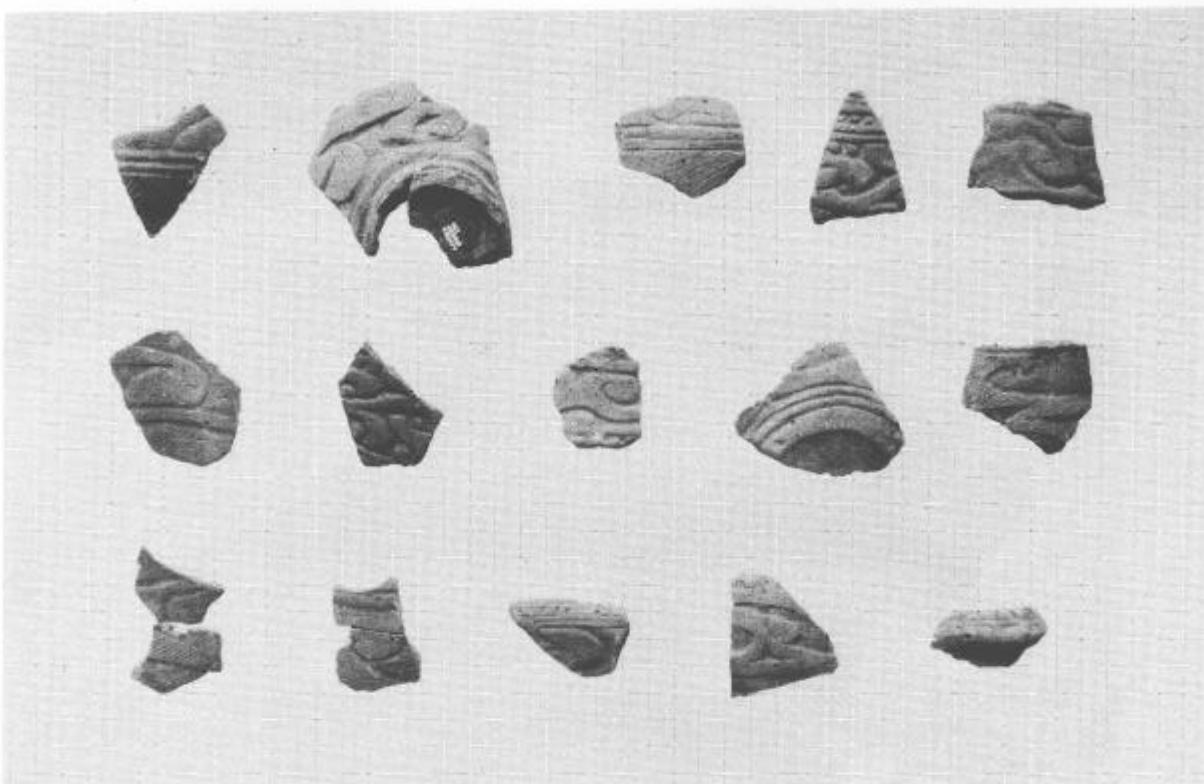
図版10 I-A区出土土器(4)



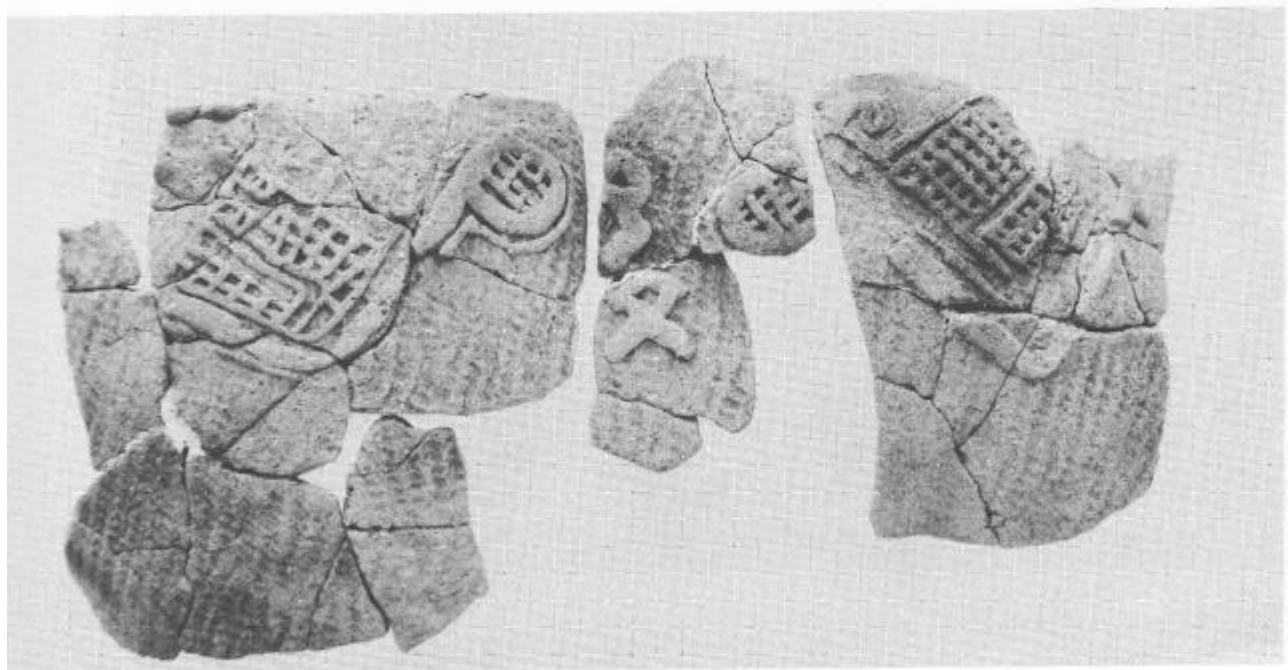
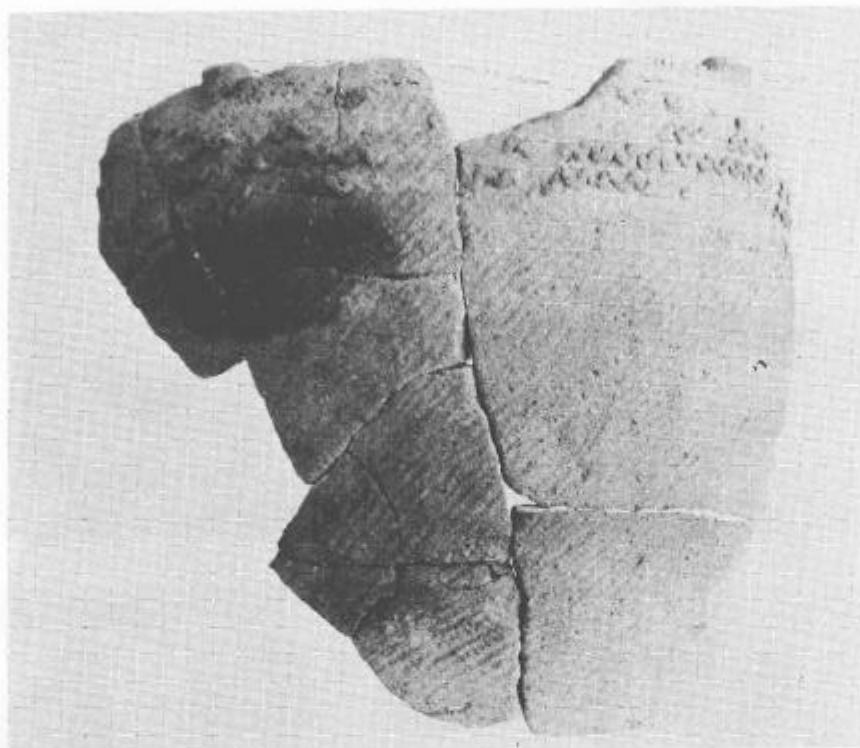
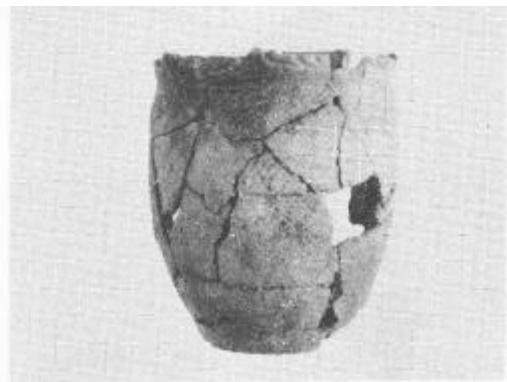
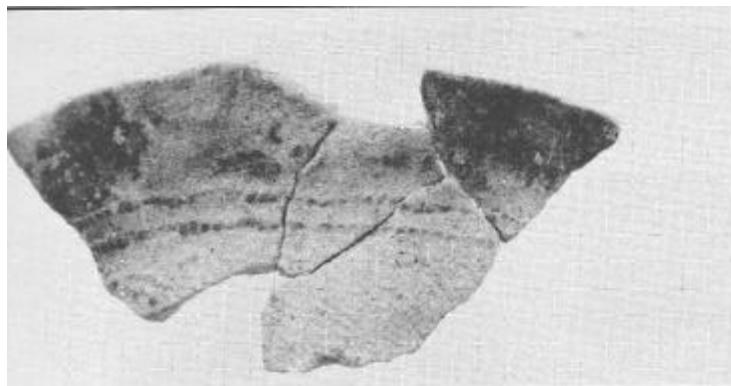
図版11 I-A区出土土器(5)



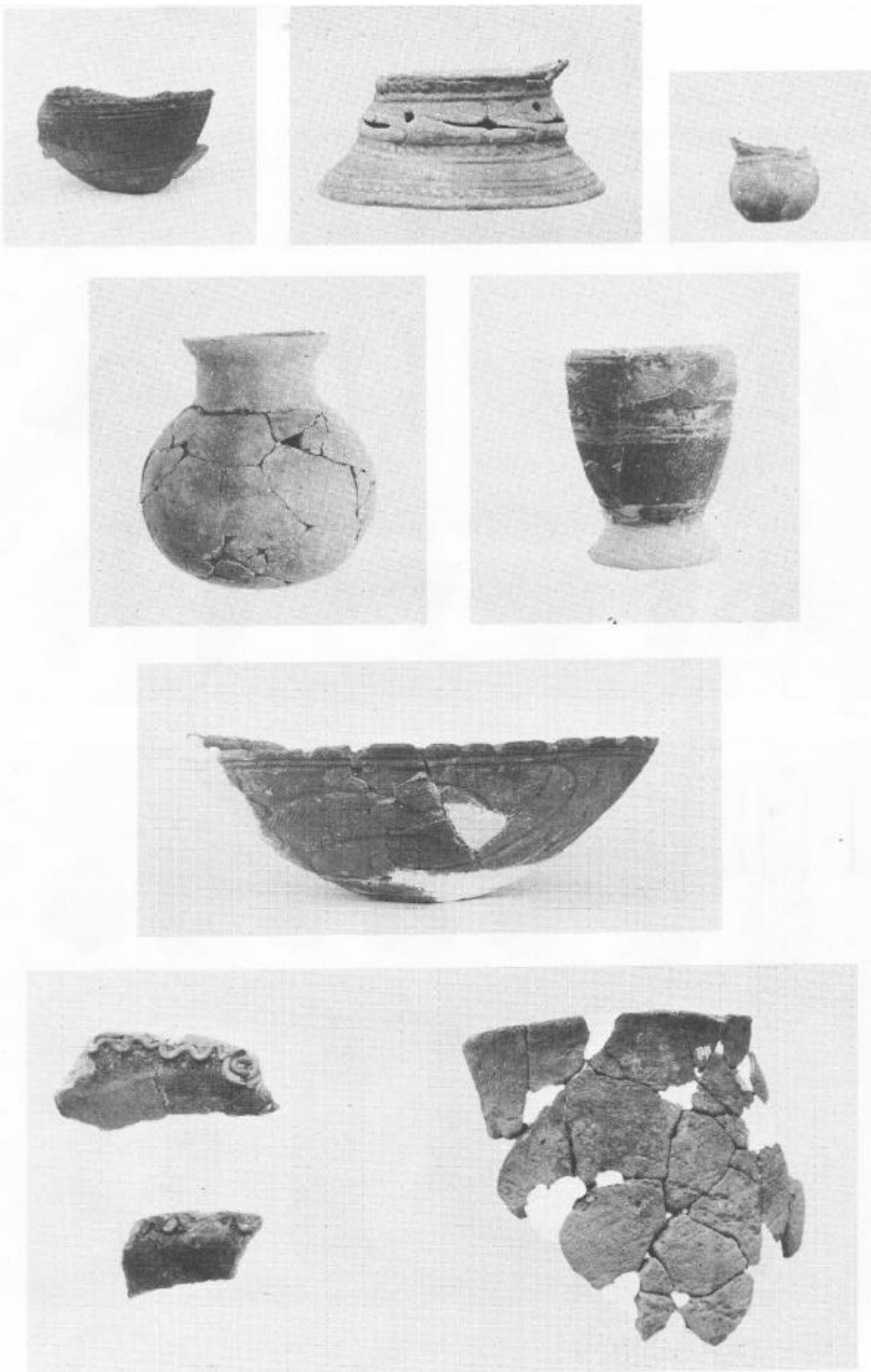
图版12 I—A区出土土器(6)



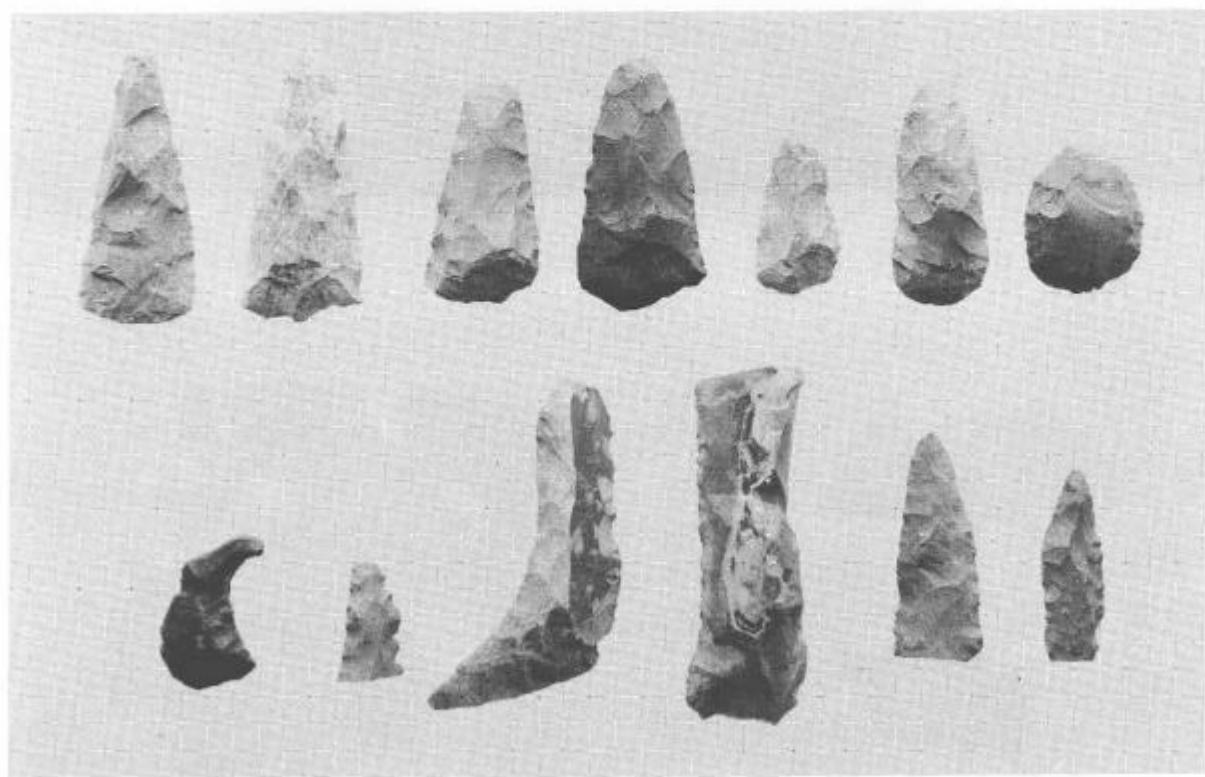
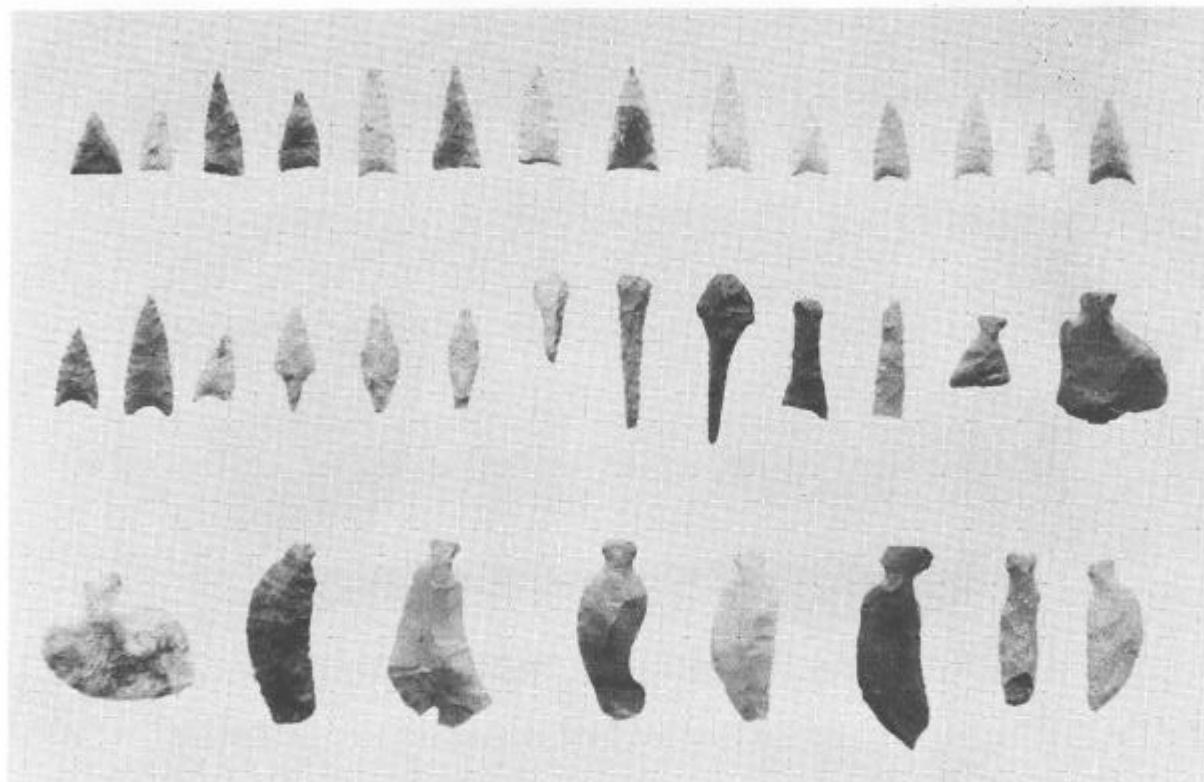
図版13 I-A区出土土器(7)



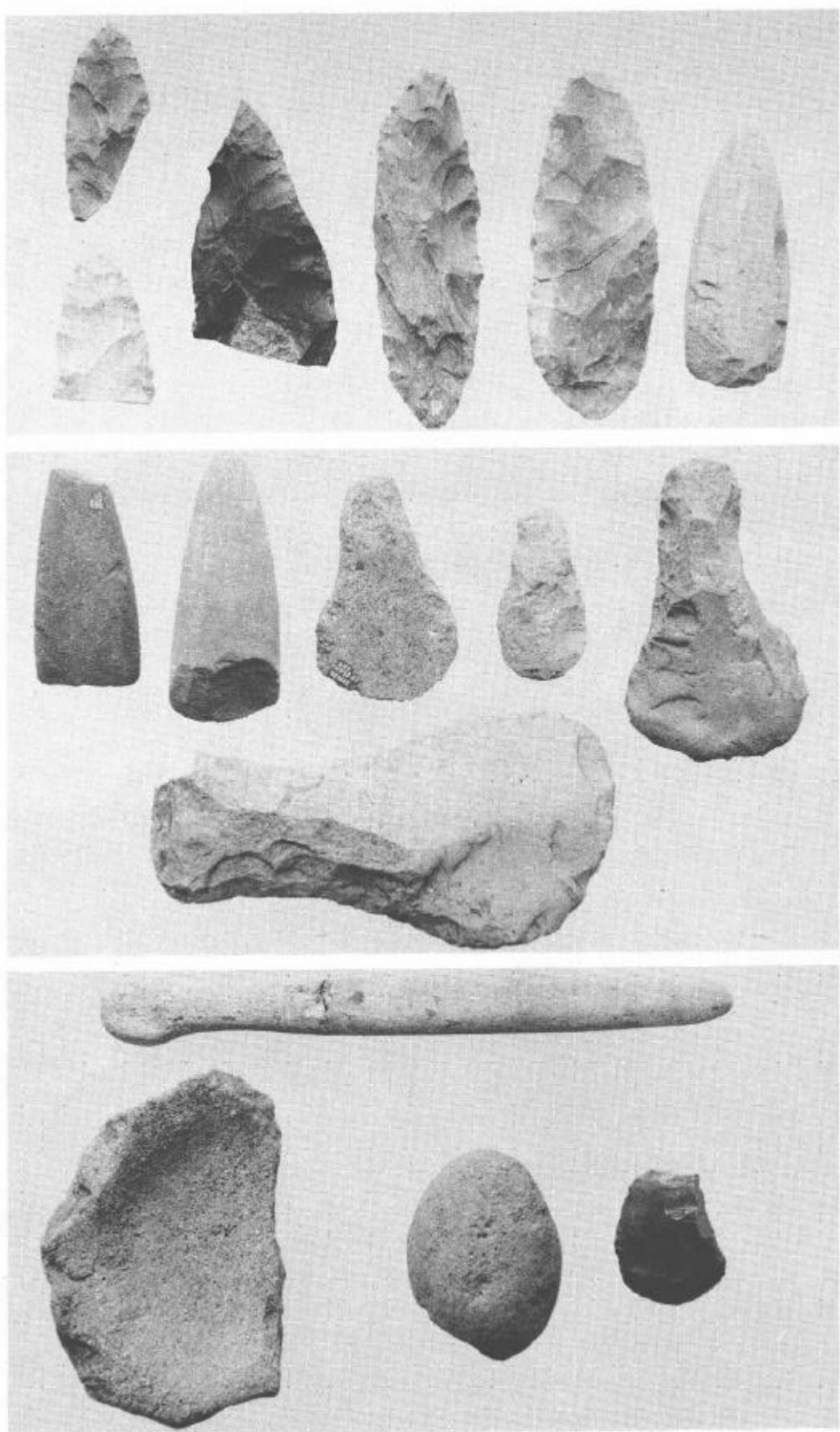
図版14 I-A区出土土器(8)



図版15 I-A区出土土器(9)



図版16 I-A区出土石器(1)



図版17 I-A区出土石器(2)

### III 宮の前遺跡第2次発掘調査概報

## 1. 遺跡の立地

宮の前遺跡は、雄勝郡稻川町八面字宮の前に所在する。皆瀬川中流域の東側には比較的なだらかな段丘面が発達しており、水田として利用されている。本遺跡は、その水田地帯の中で南北に細長い微高地上に立地している。川の東岸より1.0km離れ、県道に沿って八面部落が形成され、遺跡はさらに東に0.5kmほど入る。現況は水田の中に一段高く東西に長く畠地として残っていた所である。

## 2. 調査の概要

本遺跡の調査は、稻川地域の県営圃場整備事業のため、遺跡の所在する畠地を削平し、水田化する計画が立てられており、記録保存を目的として行われた。昭和51年には第1次調査として遺跡の範囲確認調査が行われた。

今回の調査では、調査区南側は第1次調査に準じてグリッドを設定し、平面的に括げて行き北側はブルドーザーにより表土を除去し、上面を精査する方法で調査を進めた。グリッドを設定した地区をI地区、それより北をII地区として区分した。調査面積は、I地区が約1,400m<sup>2</sup> II地区が約1,600m<sup>2</sup>であった。調査期間は6月5日～6月28日である。

検出された遺構は、I地区では、掘り込みの深さが5～20cmで皿状を呈する〈竪穴遺構〉が4基、（第1次調査で検出した小竪穴状遺構を土壤、溝状竪穴遺構を竪穴遺構として含めた。）〈掘立柱建物跡〉が1棟である。II区では、円形あるいは不定形を呈する〈土壤〉が28基、幅20～30cm、深さ約10～20cm程の〈溝状遺構〉が東西方向に走るもの3本、南北方向に走るもの2本を検出し、最も長いもので21mを測る。土壤および溝状遺構の周辺には小ピットが比較的規則的な配列で150個程見つかっている。なおI、II区の間に台地を二分する幅2.5m、長さ50mの〈大溝〉が検出され、弧状を呈している。

出土遺物は土師器杯形土器（ロクロ調整による回転糸切り痕のあるもの）、甕形土器、小型の甕形土器、須恵器大甕、砥石、轍の羽口、刀子などがある。

## 3. まとめ

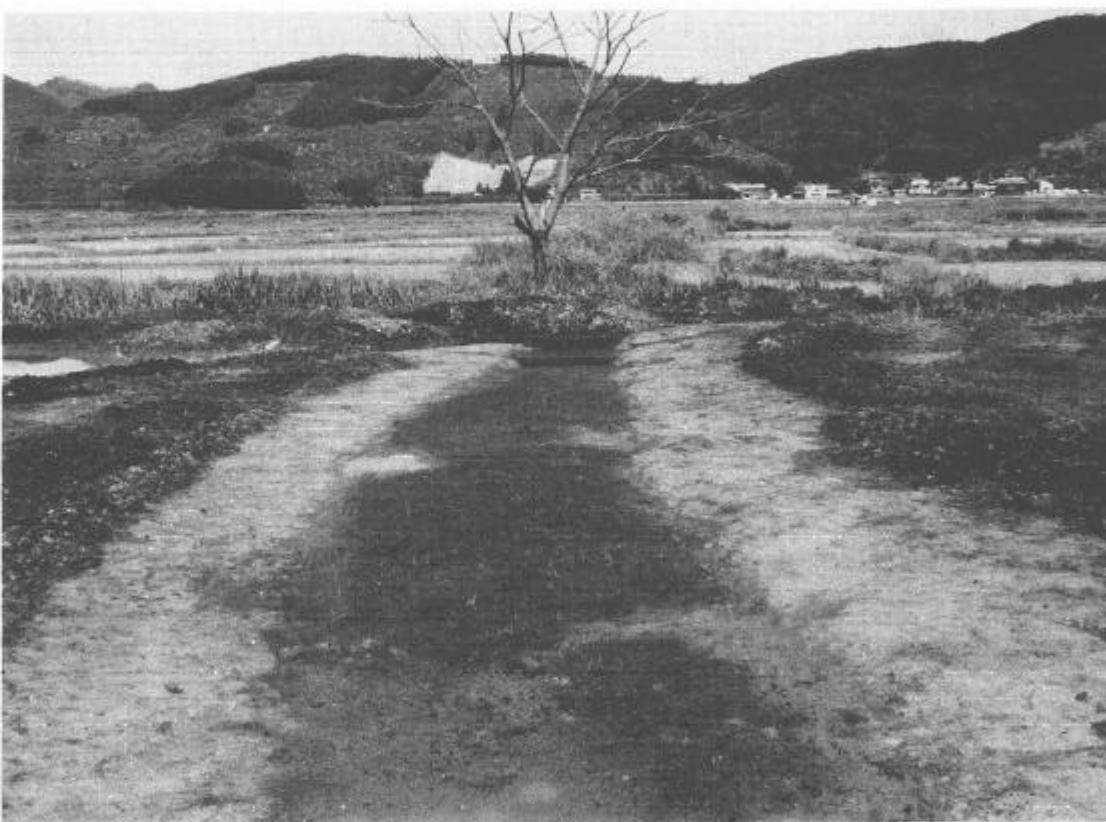
大溝を含め、検出した遺構は土壤、竪穴遺構、掘立柱建物跡などである。これらの遺構は出土遺物から見て同時期のものであり、その時代は平安時代後半を中心とした時期が考えられる。皆瀬川の中・上流域には古代の遺跡の発見例は少なく、したがってこの時代の様子は不明な点が多い。そのような地域にあって本遺跡の占める歴史的な意義は高いものと考えられる。

図版 1

遺跡全景▶



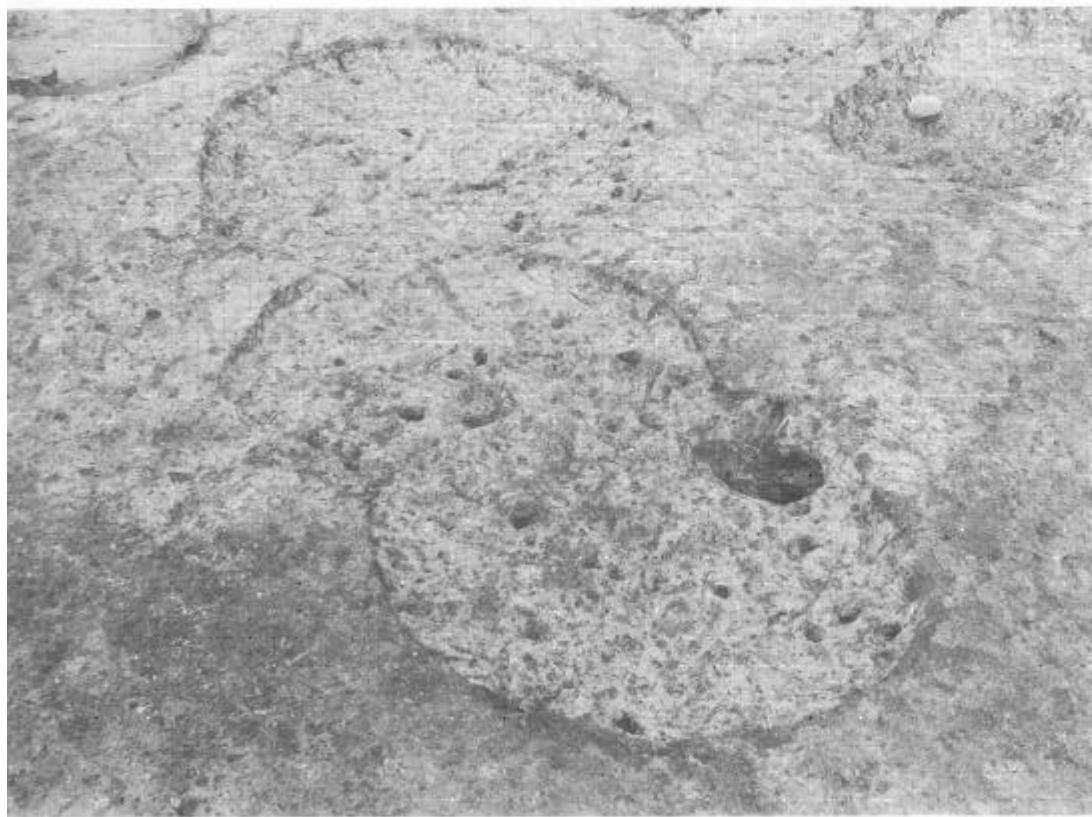
大溝▶  
(西から東)



図版 2



▲ I 地区遺構



▲ I 地区  
東南土壤群



◀ I 地区第33号土壤

◀ I 地区第34号土壤

II 地区北側(東から西)

